

DYBOWSKI のシュムシュ島アイヌ語資料について（第 1部）

村山，七郎

<https://doi.org/10.15017/2332776>

出版情報：文學研究. 67, pp.19-88, 1970-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

DYBOWSKI のシュムシュ島アイヌ語 資料について

第 I 部

村 山 七 郎

目 次

引用文献	20
略号説明	21
はしがき	22
1. 民話に反映された南千島アイヌと北海道東北アイヌとの関係	25
2. 南千島アイヌ語と北千島アイヌ語	27
3. シュムシュ島に関する記述	28
4. 北千島アイヌ語の資料	35
5. DYBOWSKI 蒐集, RADLIŃSKI 改編のシュムシュ島アイヌ語辞典	39
6. DYBOWSKI はどのようにして北千島アイヌ語を調査したか	41
7. RADLIŃSKI の編さんについて	43
8. わたしの転写	45
9. DYBOWSKI と鳥居龍蔵氏におけるアイヌ語の表わし方の比較	47
(a) <i>h</i> - の表記	47
(b) D における母音の表記の省略	49
(c) 鳥居氏における余計な母音表記	49
10. クラシェニンニコフ, DYBOWSKI, 鳥居龍蔵氏の北千島アイヌ語の語彙比較	50
11. DYBOWSKI および鳥居龍蔵資料におけるロシア語からの借用語	59
12. アイヌ語からロシア語に入った1単語について	60
13. 北千島アイヌ語と樺太アイヌ語との共通単語	62
14. 北千島アイヌ語について	64
(a) 音韻変化	64
イ. 特定の環境における子音の変化	64
ロ. 合成語における母音消滅	65

(b) 代 名 詞	66
(c) 「人 称 形」	67
(d) 数 詞	68
(e) 動 詞	73
イ. 人称による活用形	73
ロ. 受 動 の 形 式	74
ハ. 否定・禁止の形式	75
(1) <i>hem</i>	75
(2) <i>ne</i>	75
(3) 禁 止 の 表 現	77
(f) 親 族 呼 称	78
暫 定 的 な 結 論	82
註	86

引 用 文 献

- 鳥居龍蔵. 千島アイヌ, 東京, 1903年.
- 金田一京助. 樺太アイヌの音韻組織. 東京, 1911年 (金田一京助選集 I, 東京, 1960年におさめられている)
- 金田一京助. 数詞から見たアイヌ民族, 東京, 1935年 (金田一京助選集 I に おさめられている)
- 金田一京助・知里真志保, アイヌ語法概説, 東京, 1936年.
- 知里真志保. アイヌ, 言語. 世界大百科事典, 第1巻.
- 知里真志保. 分類アイヌ語辞典, 第1巻 植物篇, 東京, 1953年. 第2巻 動物篇(遺稿), 東京, 1962年. 第3巻 人間篇, 東京, 1954年.
- 知里真志保. アイヌ語入門, 東京, 1956年.
- 服部四郎編. アイヌ語方言辞典, 東京, 1964年.
- ステン・ベルクマン著加納一郎訳 千島紀行, 時事新書, 東京, 1961年.
- Л. С. БЕРГ. ОТКРЫТИЯ РУССКИХ В ТИХОМ ОКЕАНЕ. ソ連科学アカデミー編論文集ТИХИЙ ОКЕАН. Ленинград 1926.
- В. ДАЛЬ. ТОЛКОВЫЙ СЛОВАРЬ. Т. IV. СПб. Москва 1882.
- М. М. ДОБРОТВОРСКИЙ. АИНСКО-РУССКИЙ СЛОВАРЬ. Казань 1875.
- С. П. КРАШЕНИННИКОВ. ОПИСАНИЕ ЗЕМЛИ КАМЧАТКИ. СПб. 1755. (初版本は国会図書館にある. 1949年版は非常によい版である. 国会図書館にある. 筆者も所蔵する)

- C. П. КРАШЕНИННИКОВ. Vocabularium Latine-Curilce. S. Murayama, Ainu in Kamchatka. BULLETIN OF THE FACULTY OF LITERATURE. KYUSHU UNIVERSITY. No. 12, 1968.
- H. H. ОГРЫЗКО. ОТКРЫТИЕ КУРИЛЬСКИХ ОСТРОВОВ. УЧЕНЫЕ ЗАПИСКИ ЛГУ, 1953, № 157. Серия факультета Народов Севера. Вып. 2.
- МИХАИЛ ТАТАРИНОВ. ОПИСАНИЕ КУРИЛЬСКИХ ОСТРОВОВ. МЕСЯЦОСЛОВ ИСТОРИЧЕСКОЙ И ГЕОГРАФИЧЕСКОЙ НА 1785 ГОД. СПб. при Императорской Академии наук. (コピーは筆者所蔵)
- J. BATCHELOR. An Ainu-English-Japanese Dictionary. Third edition. Tokyo 1926.
- B. DYBOWSKI, I. RADLIŃSKI. Słownik narzecza Ainów zamieszkujących wyspę Szumszu w łańcuchu Kurylskim przy Kamczatce ze zbiorów Prof. B. DYBOWSKIEGO opracowany przez Ign. RADLIŃSKIEGO. ROZPRAWY AKADEMII UMIEJĘTNOŚCI. Wydział Filologiczny. Serya II, Tom I. Kraków 1892.
- B. LAUFER. The vigesimal and decimal systems in the Ainu numerals with some remarks on Ainu phonology. *Journal of the American Oriental Society*. Vol. 37, 1917.
- A. PFIZMAIER. Bemerkungen über die von La Peyrouse gelieferte Wörtersammlung der Sprache von Sagalien. *Sitzungsberichte der Kaiserl. Akademie der Wissenschaften, Februar-Heft des Jahrganges* 1850. 天理大学図書館にあり.
- B. PIŁSUDSKI. Materials for the study of the Ainu language and folklore. Cracow 1912.

略号説明

Ch. I	知里真志保. 分類アイヌ語辞典	第1巻
Ch. II	”	”
Ch. III	”	”
D	DYBOWSKI	
K	クラシェニニコフ	
R	RADLIŃSKI	
T	鳥居龍蔵	

八	八雲方言	} 服部四郎編アイヌ語方言辞典による。
沙	沙流方言	
美	美幌方言	
名	名寄方言	
樺	樺太ライチシカ方言	

樺太方言は知里氏の著書、ドプロトウォルスキー（1867-1872年 南樺太に滞在）のアイヌ・ロシア語辞典によつた場合はその旨しるしてある。

は し が き

ふつうアイヌ語は次の3方言から成ると言われる。

- A. 北海道方言 { a. 北部方言
b. 南部方言

a は「北海道の最北端の宗谷から西は日本海岸を南下して、天塩、石狩、後志に至り、東はオホーツク海岸に沿って北見・根室をふくみ、さらに太平洋岸を南下して釧路、十勝から襟裳岬を越えて日高の静内にまで及ぶ。クナシリやエトロフなど南千島の言語もこの方言に属したとみられる」¹⁾。

b は「静内 [シズナイ] 以西の日高と胆振全部に分布する」²⁾

B. 樺太方言

C. 北千島方言

Aについてはこれまでかなり多くの記述があり、またBについても古くはロシア人ドプロトヴォルスキーのアイヌ・ロシア語辞典（カザン、1875年）、ポーランド人 Piłsudski の Materials for the Study of the Ainu language and folklore（クラコウ、1912年）、ドイツ生れのアメリカ学者 B. Laufer の The vigesimal and decimal systems in the Ainu numerals with some remarks on Ainu phonology (*Journal of the American Oriental Society*. Vol. 37, 1917. 樺太アイヌ音韻組織の記述あり) などなどが国際的に知られている。また金田一、知里、服部氏らの優れた研究がある。

C については知里氏は「千島方言はもと北千島の島々に行なわれ、1912 年前後まではまだこれを記憶する老人もあったが、これもわずかな採集記録を残したのみで、今では全く消滅してしまった³⁾」とのべておられる。

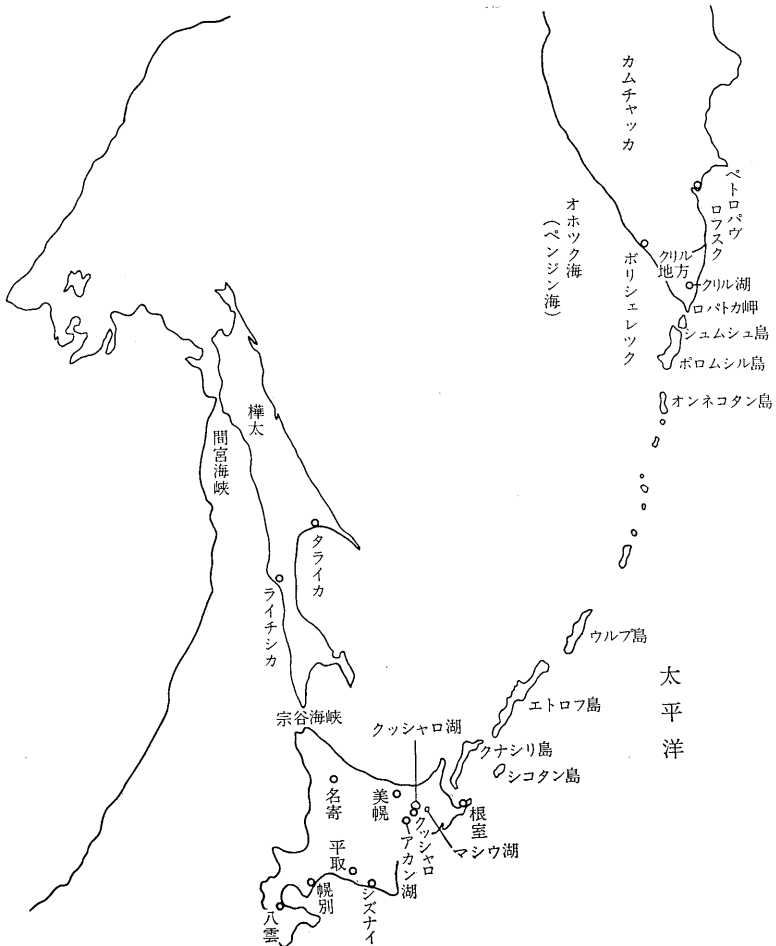
ここに「わずかな採集記録」というものの大部分は 1899 年、鳥居龍蔵氏がシコタン島においてシュムシュ島からの引揚アイヌ人の言語を調査した資料、「千島アイヌ」(1903年、吉川弘文館) 中の言語資料のことであろう。そこには 700 のアイヌ語単語とあまり多くない短文がしめされている。

アイヌ方言学をうちたてる上に、C の資料の不十分さが大きな障害となっていたようである。

ところが、ポーランドの動物学者がカムチャツカにおいてシュムシュ島出身アイヌ (複数) をインフォーマントとして採集したかなり豊富な資料が今から 77 年前にポーランドにおいて発表されていることがあきらかにあった。この資料が明らかにされたことによって、北千島アイヌ語の姿は以前よりかなり明瞭となり、ひいてはアイヌ方言学の建設の展望は従来より開けてきた、と言えよう。

わたしとしては、アイヌ語の伝播の方向の問題、つまり、アイヌ語が樺太から北海道に南下し、一部が千島に分れたのか、それとも北海道北部方言が一方では樺太にのび、他方では北千島にのびて樺太方言、北千島がうまれたのであるか、という問題の解決のヒントがアイヌ方言学によって与えられるであろう、と考えている。アイヌ語は南下したのか、北進したのか、という問題の解決は、アイヌ民族が非常に古い時代に北海道だけにしたのか、本州北部にもいたのか、それどころか日本全土にいたのか、つまり、日本列島をとって北上したのかという問題の解決にもつらなる、とおもう。

アイヌ語の専門家でないわたしが、このつたない論考を発表する気持になったのは、わが国の学者の目からかくれていた DYBOWSKI の北千島アイヌ語資料をわが国の学界に紹介しようと考えたからであるが、さらに、日本語の起源の研究が、アイヌ語との相互影響を考慮せずに不可能で



あるという見地からアイヌ方言学にも多少とも通じる必要を痛感したことも、拙論をまとめる動機となった。こういう次第で、小論はつたないひとつの習作にすぎないことをことわっておきたい。

第Ⅱ部はシュムシュ島アイヌ語・日本語辞典である。

1. 民話に反映された南千島アイヌと北海道東北アイヌとの関係

知里真志保氏の名著「アイヌ語入門」(東京, 1956, 56~58ページ年)には次のようなおもしろいアイヌの伝説がしるされている。

「クッシャロ湖の奥に、今もコト山とっている山がある。この山、アイヌ語の名を「トーエトコウヰペ」(Tó-etoko-us-pe 「湖・の頭の先・にいつも居る・者」)といい、恐しく我儘な神で、何かというと煙を吐いたり火を降らしたり、大地をゆるがして乱暴をはたらくので、あたりの山々や人間たちがひどく迷惑した。

そこで湖の落口の近くに住んでいた「ピンネシリ」Pinne-sir 「男である・山」)は、世のため人のため、この山をこらしめてやろうと決心して、果しあいを申しこんだ。

まず、ピンネシリが必死の願いをこめて槍を投げつけた。それが狙いたがわずトーエトコウヰペの胴の真中にズブリと突き刺さり、そのために山が裂け、傷口からは、血がどっと流れ出て、クッシャロ湖畔の岩を真赤に染めた。

一方、痛手に狂ったトーエトコウヰペは、血を噴きながらピンネシリめがけて槍を投げ返したが、狙いは外れて、ピンネシリの肩のあたりを僅かに傷つけただけで、槍ははるか後ろに飛んで行き、マシュウ湖畔のマシュウ岳(「カムイヌプリ」Kamúy-nupuri 「神・山」)の足に突きささった。

そこでカムイヌプリはひどく腹をたてて、千島のクナシリ島へ飛んで行き、一時その「チャチャヌプリ」(chácha-nupuri 「爺・山」)のそばへ身を寄せたが、晴天の日はアカンの方にトーエトコウヰペのもがき苦しむ醜い姿が見えるので、さらに飛んでエトロフ島へ行った。

カムイヌプリのことを、もと「オメウケヌプリ」(Oméwke-nupuri「抜けて行った・山」)、あるいは「イケスイヌプリ」(Ikésuy-nupuri「怒って去った・山」といったが、それには上のようないわれがあったわけである。

クナシリ島のチャチャヌプリの傍にかなり大きな沼があり、それはカムイヌプリがそこからふたたびエトロフの方へ飛び去った跡だといい、クシロやアカンのアイヌが千島へ行くと晴天でも雨が降るといふが、それはカムイヌプリが故郷を想い出して流す涙だといふ。

この騒ぎがあつてから、さしものトーエトウシベもすっかりおとなしくなつてしまひ、火も噴かなくなつたが、ピンネシリの槍に傷けられた所は「ヌぶりエペレテ」(nupúri-e-pere-p「山が・顔を・割つた・所」といふ大沢になり、今はドンドン川という奔流が血の色して流れている。血に染まつた岩も今なお湖畔にそのまま残つてゐる。

一方、ピンネシリは、その時以来「おナタテシケ」(Ōp-ta-teske「槍が・そこで・それた」と呼ばれるようになり、その肩の傷は今も岩が露出して昔の面影をとどめてゐる。

なお、マシュウ湖畔のカムイヌプリの裾の赤い岩は、当時カムイヌプリの流した血で、対岸の白い岩はその涙の跡であるといふ。

また、ネムロのニシベツヤメナシの海岸地方のウバユリは、カムイヌプリが、クナシリへ飛んで行くとき、そのふところからこぼれ落ちた食料だつたといふ。(太字は引用者のもの)

このアイヌ伝説は古い時代における北海道東北アイヌと南千島アイヌとの交通の反映と見られる。そしてこの伝説には、南千島アイヌが北海道東北部に移つたのでなくて、その逆であること、つまり、東北部アイヌが南千島に移つたことを反映する部分がふくまれている(「カムイヌプリが故郷を想い出して流す涙」といふことばのうちにもそれが端的にあらわれてゐるとおもふ)。

そこで、南千島アイヌ語と東北アイヌ語(北部方言)との間に密接な関

係が見出されるとしても不思議でない。知里氏が「クナシリやエトロフなど南千島の言語もこの方言〔北部方言〕に属したとみられる」(前掲)と述べておられるのは、けだし正当である。

それでは、北海道北部方言に属したと見られる南千島アイヌ語は北千島アイヌ語とどのような関係にあったのか。この問題は次の節でとりあつかわれる。

2. 南千島アイヌ語と北千島アイヌ語

18世紀前半における南千島アイヌ語と北千島アイヌ語との間のきわめて近い関係を暗示する短いが、しかし貴重な、材料がロシアにある。それはクラシェニンニコフの名著「カムチャツカ地誌」(第1版、ペテルブルグ、1755年、120ページ)の中のつぎの記事である。

「クナシリ〔島〕住民の言語は第2島ポロムシル島で話される言語とほとんど何らの相違もない (не имеет никакой отмены)。シパンベルグ艦長が〔1739年〕日本に向けて航海したとき、艦長の通訳であったクリル人〔アイヌ〕リパガ Липага〔ポロムシル島出身〕が艦長にこう断言した。そこでエトロフ島、ウルップ島の住民もその言語において〔ポロムシル島の〕クリル語〔アイヌ語〕と大きなちがいをもたないことは疑いえない。」

アイヌ人リパガの1739年の上記のことばは、北千島アイヌ語と南千島アイヌ語との近い関係についての有力な証拠である。

知里氏によれば、南千島アイヌ語は北海道北部アイヌ方言に属したと見られるから、1739年ごろ北千島出身のアイヌ人リパガが、北千島のアイヌ語と南千島アイヌ語とがほとんど何らの差異もないと証言しているとなれば、北千島アイヌ語も南千島アイヌ語とおなじく、北海道北部アイヌ方言に属すると結論することができそうである。

参考までに上に引用した航海について、エリ・エス・ベルグの論文から次の個所を引用しておく。

「1739年5月21日にシバンベルグはポリシェレツクから出帆して日本海岸に向った。6月16日北緯39°で日本の東海岸を見た。海岸に沿って南下し、6月22日ほぼ38°26'で停泊し、日本人と接触した。」⁹⁾

ポロムシル出のアイヌ人リパガのことは1739年のものであり、クラシニンニコフがポリシェレツクでシュムシュ、ポロムシル島アイヌをインフォーマントとしてアイヌ語をしらべたのは1738年7月であつた。18世紀前半には北千島アイヌ語と南千島アイヌ語とはあまり相違がなかつたと見られるのである。

3. シュムシュ島に関する記述

シュムシュ島(ソ連の最新の地図 Atlas СССР, Москва 1969, 55 には Шумшу シュムシュとあり、ロシアの最古の記録——イワン・ゴズイレフスキーが1726年ヤクターツクでベーリングに与えた「海島地図」——には Шумчю シュムチュとあり、クラシニンニコフの1738年の記録には Шоумшчю ショウムシチュとあり、1785年度メシヤツォスロフ(СПб.)に発表された「クリル諸島地誌」Описание Курильских островов (p. 78)によれば Шоумшчу である。もともと *Soumusir* であったと見られる。金田一京助教授は占守島の原名を Shi moshir 「大島」(cf. *Shi kotan* 「大村」, 色丹島の原名)と解される(金田一京助選集 I, p. 251)。しかしロシア側資料において第1音節に i があらわれないので、この語源説を正しいものとして受けとってよいかためらわざるをえない。「クリル諸島地誌」によると、この島の「中部の東岸に海の近くに高い ярь [懸崖か?] とときり立つ岩(複数)があり、岸の近くにたくさんケクル(岸の近く、又は岸に壁や柱のように立つ高い石)がある」と述べてあるところから見ると、*Sou-mosir* の *sou* は *si* ではなくて、樺太アイヌ語の *so* 「海につきでている岩石」(ドブロトウォルスキー, アイヌ・ロシア語辞典, 306ページ)と関係がであり、「大・島」でなくて「岩石・島」と解した方が適当ではなからうか。

シュムシュ島についての最初の記述は、ポーランド系のロシア人イワン・コズイレフスキー (その祖父はポーランド人) が、1713年に自分がシュムシュ、ポロムシル島を遠征したとき得た情報をもとにしてつくり1728年ヤターツクでベーリングに与えたカムチャツカ南部・クリル列島地図 (モスクワの中央古文書館 ЦГАДА, Портф. Миллера, № 533, тетр. 2, л. 2, об. はミレルによるそのコピー。そのもっとも鮮明な写真とオグレイスコ氏によるレグendetの解説がレニングラード大学ウチョーヌイエ・ザピスキ No. 157, 1953年に発表された) に出ている。「第1島シュムチュ・Шумчю」「この島にはクリル人たち Курила が住み、遠い島々に出かける。その土地の習慣に従って、首すじのところまで頭をそり、跪いてお辞儀をする。ラッコ、狐、鷲、鷲の羽を買うために遠い島々から〔人々が〕ここへやって来る」「第2島。プルムシル Пурумушир」「第1島と同じ異人が住む。言語と宗教が〔第1島住民と〕同じ。イラクサの織物を織り、またいくらか緞子、木綿を買う。遠い島々に出かける。また遠い島々から異人たち〔アイヌ〕が絹や木綿や、鍋や刀を売りに来る……」これによると1713年ころはシュムシュ島にもポロムシル島にもアイヌ語をばなすアイヌ人がいたのである。

コズイレフスキーのつぎにシュムシュ島について報告したのはクラシェニンニコフである。クラシェニンニコフの命令をうけて兵士のプリーシキン Плишкин が1738年5月6日～6月3日シュムシュ島に滞在して調査して報告したものが、「学生ステパン・クラシェニンニコフ編クリル人たち及びクリル諸島訪問兵士〔プリーシキン〕報告によるクリル諸島地誌」(「カムチャツカ地誌」1949年版667～670ページ)である。

シュムシュ島に関する記述はつぎの通りである (ポロムシル, シリンキ, マカナルルアシ, オンネコタン, ハラマコタン, シャスコタン島についてもずっと簡単に記述されているが、ここでは省略する)。

「クリル列島の第1島はショウムチュ Шоумчю という。北東から南西に長さ70露里〔1露里は約1キロ〕, 幅40露里。上端は南にのびるクリ

ル・ロパトカ〔ロパトカ岬〕に向いあっている。第1島とロパトカ岬との間の距離は15露里。晴れていれば約3時間足らずで海峡を漕いで渡れる。

タンネムイ川 Таннемуй はシヨウムシチュ ショウムシチュ 島の上端から3露里ほど離れている。水源は沼で西側から2露里流れ、東の海〔北太平洋〕に注ぐ。この川の水源はベンジン海〔オホツク海〕にそそぐ川の水源と向きあっている。

チプトピト Чипутпит 川の水源は河口から約12露里。それらの水源間の距離は1.5露里。この場所における島の幅は3露里。

ウレワテリ Уреватырь 川。タンネムイ川から6露里離れている。西側から1.5露里流れ、東の海〔北太平洋〕にそそぐ。水源は沼。

オホオケト Охоокыт 川。ウレワテリ川から5露里はなれ、西側から走り東の海に注ぐ。水源は島のまん中にある湖。

テンテン Тентен 川。オホオケト川と同じ湖が水源で、東側から流れ、ベンジン海〔オホツク海〕にそそぐ。島の幅はこの場所で30露里。

アンガシリカ Ангасирика 川。オホオケト川から10露里はなれ、島のまん中の湖から出て、東の海にそそぐ。もうひとつのテンテン川は東側から流れてベンジン海〔オホツク海〕に注ぐ。水源は湖。この湖はアンガシリカ川の水源の湖に近い。この場所の島の幅は40露里。

プヤプヤキ Пуяпуяки 川。アンガシリカ川から15露里離れている。水源は泉で、西側から2露里流れて東の海に入る。

チャクシュト Чакшут 川は東側から2露里流れてベンジン海に入る。水源は泉。

クサンガキ Ксангаки 川は、プヤプヤ川から5露里離れており、島の中央から、西側から流れ、東の海に入る。水源は沼や湖である。鮭や鱒がいる。

シプク Сипук 川。東側から2露里流れ、ベンジン海にそそぐ。水源は沼。

Дубовски のシムシュ島アイヌ語資料について (村山)

ヌトムイ Нутмуй 川. クサングキ川から 4 露里離れ, 水源は島の中央の湖. 東の海にそそぐ. 鮭, 鱒, 赤魚 (クラスナヤ) がいる.

シプク Сипук 又はクムフ Кумх 川. 東側から 1 露里流れ, ペンジン海にそそぐ. 上シプク川口と下シプク川口との距離は 1 露里.

サンサンチュ Сансанчю 川. ヌトムイ川口から 8 露里離れている. 湖が水源で西側から流れ, 東の海にそそぐ. 川口は南東. 鱒, 鮭, 白魚 (ベーラヤ), 赤魚 (クラスナヤ) がのぼる.

ピトプク Питпук 川. 長さ 2 露里, 幅 1/4 露里の湖の中央から発し, 東側から 100 サージェン (1 サージェンは 2 メートル余) 流れる. 鮭, 鱒, 白魚, 赤魚, クンジャ [鮭の一種] がのぼる. 東側から次の川が湖にそそぐ.

1. クシャアキ Кшааки 川. 泉から 2 露里流れ, 湖の上端にそそぐ.
2. クシャアキ Кшааки 川. (ママ) 小湖水から 1.5 露里流れ, 上記の川より半露里下方で湖にそそぐ.
3. パシクリュピト Пашкюрюпит. 沼から 10 露里流れ, クシャアキ川より半露里下方で湖にそそぐ.
4. キリュロンピト Кирыронпит. 沼から 5 露里流れ, 湖の下端にそそぐ.

コンガレシキ Конгарышки 川. サンサチュ川から 15 露里離れている. 泉が水源. 西側から 3 露里流れ, 東の海にそそぐ. 川口は南南西. 鮭がのぼる.

ウラトム Уратму 川. コンガレシキ川から 5 露里はなれている. 泉が水源で, 1 露里ながれ, 第 2 島 [ポロムシル] と第 1 島 [シムシュ] との間の海峡にそそぐ. 川口は南西.

ナトカウムピト Наткаумбит 川. ウラトム川から 1 露里はなれている. 泉から半露里流れ, 第 1 島, 第 2 島間の海峡にそそぐ.

チウムキ Чимумки 川. ナトカウムピト川から半露里はなれている. 泉から 1 露里流れ, 上記の海峡にそそぐ.

アシ・フリユピシプ Аши-Хурюпишпу 川, チウムキ川から2露里はなれている。泉から50サージェン流れ, 上記の海峡にそそぐ。この川のふちでクリル人の男2名が2つの小舎で暮らしている。

ホリュピシプ Хорюпишпу 川, アシ・フリユピシプ川から半露里はなれている。泉から半露里流れ, 海峡にそそぐ。この川のふちに4つの小舎に役人(ヤサウル)と, 毛皮税をおさめる異人11名が住んでいる。

モエルプト Моэрпут 川, ホリュピシプ川から1露里はなれている。泉から5露里流れ, 同じ海峡にそそぐ。この川のふちに古い異人小舎が6つあり, 現在は誰も住まない。これらの小舎から速くないところにある山に第1島の異人の長(トヨン)クペニャが4つの小舎に住んでいる。彼のもとは毛皮税をおさめる者と未成年者が15名いる。島全体では納税者は合計44名であり, このうち何名かはクリル・ロパトカ〔ロパトカ岬〕に住んでいる。】(「カムチャツカ誌」1949年版, 667, 668ページ)。

以上の記述に出て来た川の名をロシア・アルファベット順に配列し, ローマ字転写をすれば次のようになる。

シュムシュ島の川の名

1	Ангасирика	<i>Angasirika</i>	アングシリカ
2	Аши-хурюпишпу	<i>Asi-xur'upišpu</i>	アシ・フリユピシプ
3	Кирюронцит	<i>Kir'uronpit</i>	キリュロンピト
4	Конгарышки	<i>Kongariški</i>	コンガレシキ
5	Кумх	<i>Kumx</i>	クムフ
6	Кшааки	<i>Kšaaki</i>	クシャアキ
7	Моэрпут	<i>Moerput</i>	モエルプト
8	Наткауμβит	<i>Natkaumbit</i>	ナトカウムビト
9	Нутмуй	<i>Nutmuy</i>	ヌトムイ
10	Охоокыт	<i>Oxookit</i>	オホオケト
11	Пашкүрүпит	<i>Paškur'upit</i>	パシクリュピト
12	Питпук	<i>Pitpuk</i>	ピトプク

13	Пуяпуяки	<i>Puyapuyaki</i>	プヤプヤキ
14	Сансанчю~Сансачю	<i>Sansanču~Sansaču</i>	サンサンチュ〜 サンサチュ
15	Сипук	<i>Sipuk</i>	シプク
16	Таннемуй	<i>Tannemu</i>	タンネムイ
17	Тентен	<i>Tenten</i>	テンテン
18	Уратму	<i>Uratmu</i>	ウラトム
19	Уреватырь	<i>Urevatir'</i>	ウレワテリ
20	Хорюпишпу	<i>Xor'upišpu</i>	ホリュピシプ
21	Чакшут	<i>Čakšut</i>	チャクシュト
22	Чиумуки	<i>Čiumuki</i>	チウムキ
23	Чипутпит	<i>Čiputpit</i>	チプトピト

上記のうち *pit* (北海道アイヌ *pet*) 「川」のついているものは

- 3 *Kir'uron-pit*
- 8 *Natkaum-bit*
- 11 *Paškur'u-pit*
- 23 *Čiput-pit*

上記の河川名はすべてアイヌ語と見られる。これらの名称を河川に与えた民族がアイヌ人であったことは間違いない。しかし、クラシェニンコフは、シュムシュ島のクリルはポロムシル島のクリルと異なってカムチャダルだと考えていたことは、次の引用から明らかである。

「この島〔シュムシュ島〕の住民はクリル・ロパトカ〔岬〕の住民と同じく、ほんとうのクリル人ではなく、カムチャダル族である。彼らは仲間争いにより、とくにロシア人の〔カムチャダル人居住地への〕進出によって、他の人々から分れて、この島とロパトカに移住したのである。彼らは通婚によって親族関係を結んだ第2島〔ポロムシル島〕住民にならって、クリル人と呼ばれるのである。彼らはクリル人の風習をいくつかりいれたばかりでなく、外貌が自分たちの祖先とかなりちがってしまった」(「カ

ムチャツカ地誌, 1949年版, 166 ページ).

「第1島〔シュムシュ島〕とクリル・ロパトカ〔岬〕の住民はその言語, 風習, からだつきにおいてカムチャダル人といくらか異なるが, 彼らが南カムチャダル人に由来することは確実にわかっている. 上記の差異はほんとうのクリル人〔ポロムシル島及びそれより南のクリル=アイヌ人〕との隣接, 交際, 通婚によるのである」(同上, 358 ページ).

この記述に対しては疑問が生まれる.

ブリーシキン——クラシェニンニコフの後にクリル諸島のまとまった記述をしているのは1785年度のメジャツォスロフ誌 (Месяцослов исторической и географической на 1785 год, СПб, при Императорской Академии) にのった「クリル諸島地誌」Описание Курильских островов (私の手許にこのコピーがある) である (オ・ペトロワの「アンドレイ・タターリノフの露和レクシコン」モスクワ1962, p. 8によればこの「地誌」の編者はイルグーツクの住民ミハイル・タターリノフで, イワン・チェルスイフ, オチュレディン, アンティーピンの手稿をもとにしている).

この「地誌」には「クリル・ロパトカ〔岬〕に近いショウムシチュ Шоумшчу 島」について次の記述がある.

「クリル・ロパトカとショウムシチュ島との間に15露里の海峡がある. 島は北東から南東〔南西の誤り〕に50露里のび, 幅は30露里, 低い. 島の中部の東岸には海の近くに高い яр (懸崖か) と切り立った岩石があり, 岸の近くには沢山のケクル (岸の近くや岸に立つ高い壁状又は柱状の岩石) がある. 島には様々の鉱物——中には銀鉱もある——が見出される. 先ず銀鉱が採掘された. 北側は西の方に向かって岸は砂で, 処によっては石が多い. 島の中部では周囲約5露里の湖があり, そこから川が海に流れている. この主流のほか, 小さな川が沢山ある. なぜなら, 湖や沼があるから. 海に流れる川には5月と9月にいろいろな海魚——鮭, 鱒, Галцы (魚名), Кужи (魚名) がのぼる. 晴れた日に海で釣竿で Терпуги, 鱈, Рямжа (魚名) を釣る. 小さなはんのき, 柳, 地にはう杉——小さな堅果

ДЫБОВСКИ のシムシュ島アイヌ語資料について (村山)

がなる——のほか 林は無い。海岸には鯨、えび、蟹が波でおしあげられる、島には甘草が生え、それで酒をつくる。また Купрен (植物名), Кутагорник (植物名), にんじんが生え、島民の食料となる。

女たちはイラクサで綱や綱をつくる。島には各種の鼠が沢山いて、島民はナウシチチ наушьчичи と呼ぶ。

この島には毛皮税を納める者が 44 人いる」(78, 79 ページ)。

4. 北千島アイヌ語の資料

北千島アイヌ語に関する公表されたもっとも古い資料はクラシェニンコフ (1713~1755) の「カムチャツカ地誌」(クラシェニンコフの研究者にとって、第 1~2 版と同じく 1949 年版が不可欠である) 第 3 部 pp. 185~188 の「クリル語」語彙である。これは拙論 *Ainu in Kamchatka Bulletin of the Faculty of Literature Kyushu University, No. 12, Fukuoka* 1968 の付録に、初版本からの写真の形で掲載されているから、今では容易に見ることができる。さらに上記の拙論にはこの資料ときわめて密接な関係のあるクラシェニンコフのラテン・クリル語資料 (レニングラードの科学アカデミー・アルヒーフの原稿 R. I, op. 13, No. 10, papers 209-214) が世界ではじめて発表された⁶⁾。

クラシェニンコフの両資料はアイヌ語研究上きわめて重要なものであるにもかかわらず、従来は、どこで、どのようにして蒐集されたものであるか明らかでなかったが、それを明らかにする資料が「カムチャツカ地誌」1949 年版においてはじめて発表された⁷⁾。関係部分を訳して見よう。

[] はわたしの補足。

「[1738 年] 7 月 19 日, 当地 [ポリシェレツク] に兵士ステパン・ブリーシケン Степан Плишкин が到着し, 私に [シムシュ島, オンネコタン島訪問について] 報告を行ないました。クリル人の衣服などを買うために私は彼を [シムシュ島に] 派遣したのです。

彼は与えられた命令に従ってポリシェレツクから 3 月 19 日に出発し [カ

ムチャツカ最南部の] クリル地方 (クリリスカヤ・ゼムリーツァ) に向い、3月23日 [クリル] 湖に着きました。……彼ブリーシキンは5月6日まで湖畔に住み、クリル湖に注ぐ河川を記述しました。

4月29日 [クリル湖] から出発し、その日のうちにロパトカ岬につき、5月6日までロパトカですごしました。

5月6日まひるごろ皮舟にのって彼ら [ブリーシキンとその一行] は第1島 [シュムシュ] につきました (p. 574)。

「彼は6月3日まで第1島に住み、命令中に指定されている期日におくれないように、ポリシェレツクに帰ろうと欲しました。しかし、徴税人フルマン Фурман は彼に皮舟をやりませんでした。というのは [島の] 男たちは毛皮税として納められる獣を捕獲していなかったからです。フルマン氏は同日、すなわち6月3日に第2島 [ポロムシル島] に出発することになりました。そこで彼 [ブリーシキン] も、第2島訪問の命令を受けておりませんでした。フルマンに随行することにしました。徴税人 [フルマン] が第2島から [第1島に] 帰るまではロパトカに戻ることは不可能でしたので、彼も第2島に同行したのです。

第2島に着いて彼 [ブリーシキン] はクリル人たちから海獣——おっとせい、あざらし——を買いました。……また2つの海魚を捕り、鳥では鵜 (uril) [参照・北海道アイヌ語 *urir* 「鵜」], スタリーク [ダーリ辞典によれば、カムチャツカの海鳥, *Uria senicula*], ロシア名のわからないもうひとつの鳥を捕えました。

「彼ブリーシキンは第1島と第2島の異人を [各1名] つれて来ました。そのうち1人 [多分シュムシュ島住民] はカムチャダル語を知っており、もう1人 [多分ポロムシル島の住民] は第3島 [オンネコタン島] に行っていたことがあります (p. 575)。

「ブリーシキンは [1738年7月19日ポリシェレツクに] つれて来た異人たち [2名のクリル] によつて私は彼らの言語の単語を記録し、彼らの信仰と習慣について、また遠いクリル諸島について……たずねました。そし

て島々の付近にいる獣・鳥・魚の目録をつくり、この報告に沿えます。

これらの異人に、たずねるべきものはみなたずねてから、[1738年] 7月31日、その住処に彼らを帰しました」(p. 576)。

この記事によって、兵士プリーシキンがシュムシュ島のアイヌ1名、ポロムシル島のアイヌ1名をつれて1738年7月19日ポリシェレツクに到着し、同年7月31日までクラシェニンニコフが2人の言語をしらべた結果、前記2資料が出来たことが明らかとなった。クラシェニンニコフはカムチャダル語を知っており、クリル人の1人(多分、シュムシュ島の)もカムチャダル語を知っていたのでクリル語(アイヌ語)の意味をカムチャダル語でクラシェニンニコフに説明したであろう。

さて、ポロムシル島のアイヌの言語がアイヌ語であったことは疑いないが、シュムシュ島のクリルの言語が何であったかには多少問題がある。この島の住民はカムチャダル語とクリル語との両方を用いていたと見られるが、クラシェニンニコフもシュテラーもロパトカ及びシュムシュ島の言語を、カムチャダル語を根幹としクリル語(アイヌ語)の要素を若干ふくんでいたと見ている点に問題が残る。ここでは、この問題に深入りしない。ただクラシェニンニコフのクリル語資料は1738年採集のシュムシュおよびポロムシルのアイヌ語であることはたしかである。

クラシェニンニコフ(1738)以後DYBOWSKIのシュムシュ島アイヌの調査(1878~1882)の時までの約140年間における北千島アイヌ語の調査について今のところ私はあまり知らない(将来、埋もれている資料が発見される可能性がある)。

そして、1889年(明治32年)、人類学者鳥居龍蔵氏の北千島アイヌの人類学的および言語学的調査が行なわれたのである。

1884年(明治17年)シュムシュ島のアイヌ人90人あまりは北海道に近いシコタン島(アイヌ語 *Shi Kotan* 「大きな村」)に強制移住させられた⁷⁾。鳥居氏が調査したのは、これらの北千島アイヌであった。鳥居氏の調査結果は「千島アイヌ」(1903年)となってあらわれた。この貴重な調査の中

には、若干の簡単なシュムシュ島アイヌ語文と約700の単語がふくまれている。

シコタン島に住んでいた北千島のアイヌの言語がいつごろまで同島にのこっていたが、わたしには不明であるが、1930年代の終りころには北千島語を記憶するアイヌ人は存在していなかったであろう⁹⁾。1930年9月シコタン島を訪れたステン・ベルクマンはシュムシュ島引揚げのアイヌ人たちに会っているが、アイヌ語採集についてはなにも述べていない。

要するに北千島アイヌ語の資料としては少なくとも下記の4つがある。

(1) クラシェニンニコフのラテン・クリル語彙集 (1738年、ボリシェレツクにおいてポロムシル、シュムシュ・アイヌをインフォーマントとして記録。レニングラードのソ連科学アカデミー・アルヒーフに原稿として保存され、ソ連では発表されず、*Bulletin of the Faculty of Literature Kyushu University, No. 12* において発表された)。

これは(2)にあげるロシア・クリル語彙集とほとんど合致するが、次の単語は(2)のものにはふくまれていない。

熊	<i>Kamùì</i>
飼い馴らした鹿の種類	} <i>Ják</i>
野生の鹿の種類	
鴨	<i>Tschirpu</i> [čirpu]
翼	<i>Teikùp</i>
牛乳	<i>Toopi</i>
しらかば	<i>Tanni</i> < <i>tat-ni</i>
尾	<i>Otschontschò</i> [očoncò]
肉	<i>Kam</i>

また(2)の資料の読み方を明らかにしたり、その誤りを正すのに重要である。

(2) クラシェニンニコフの「カムチャツカ地誌」(1755年)第3部のロシア・クリル語彙集。(1)と密接な関係がある。

DYBOWSKI のシュムシュ島アイヌ語資料について(村山)

(3) DYBOWSKI が 1878~1882 年カムチャツカにおいてシュムシュ島出身アイヌをインフォーマントとして採集し RADLIŃSKI が発表した資料(クラコウ, 1892年).

(4) 鳥居龍蔵氏が 1889 年シコタン島においてシュムシュ島アイヌ人についてその言語を調査し 1903 年に「千島アイヌ」において発表したもの。(3) と (4) とは密接な関係がある。

これらの記録の比較研究によって、北千島アイヌ語のすがたはこれまでよりもあきらかとなる見通しがでてきた。

知里真志保氏は、「千島方言はもともと北千島の島々に行なわれ、1912 年前後まではまだこれを記憶する老人もあったが、これもわずかな採集記録を残したのみで、今では全く消滅してしまった」(平凡社世界百科事典, I-31) と述べられたが、これが書かれたころはドゥイボフスキー資料は日本ではほとんど知られていなかったようであるし、クラシェニンニコフのラテン・クリル語彙集も知られていなかった。

5. DYBOWSKI 蒐集, RADLIŃSKI 改編のシュムシュ島アイヌ語辞典

ポーランドの動物学者ベネドゥイクト・ドゥイボフスキ Benedykt Dybowski のシュムシュ島(千島列島最北島、ロシア側は古くは「第1島」と番号をつけていた)のアイヌ語資料は日本ではあまり知られていなかったようである。

この貴重な資料が、アイヌ語の研究の、世界でもっともさかんな日本において知られるに至らなかった理由のひとつは、この資料をふくむ論文がポーランド語で発表されたことであろうとおもう。またこの資料がバチエラーの An Ainu-English-Japanese Dictionary と B. PIŁSUDSKI の Materials for the study of the Ainu language and folklore, Cracow, 1912 にも挙げられていなかったことも、その理由のひとつをなしていたかも知れない¹⁰⁾。〔原稿を印刷にまわした後で、金田一教授が言及されていることを知った。選集 I, p. 456〕

ともあれ、シュムシュ島アイヌ語のもっとも豊富な資料が77年間もわがくにの学者の注意からほとんどはずれていたのである（この資料が公表されたのは1892年、ポーランドのクラコウにおいてであった）。

この資料というのは次の通りである。

Słownik narzecza Ainów, zamieszkujących wyspę Szumszu
w łańcuchu Kurylskim przy Kamczatce
ze zbiorów Prof. B. Dybowskiego
opracowany prez
Ign. Radlińskiego

（カムチャツカに近いグリル列島シュムシュ島に住むアイヌ人の方言辞典，B. ドゥイボフスキー教授蒐集，イグナチウス・ラドリンスキー編）

これはドゥイボフスキーの蒐集したカムチャツカ諸住民の方言辞典の第1編をなす。

これを掲載したのは ROZPRAWY AKADEMII UMIEJĘTNOŚCI. WYDZIAŁ FILOLOGICZNY. Serya II, Tom 1, Kraków 1892（科学アカデミー紀要，フィロロギー部，第2集第1巻，カラコウ1892）である。

つぎに、この資料を入手した経過についてのべておきたい。わたしは参考文献にあげた LAUFER の論文によって、この北千島アイヌ語資料の存在を知った。約2年前、アメリカのイエール大学のサンスクリットの教授で該博な日本学の知識をもたれる ヨハンネス・ラーダー氏 Johannes RAHDER がクリスマス・プレゼントとしてこの辞典の縮刷コピー数枚を郵送してくださった。そのうえ掲載誌名をも報せて下された。たまたまコラコウの大学に留学中の友人でスラヴィストの小林正成氏に同論文の写真の送付を依頼したところ、古貴重書の部類に属し、コピー作製の手続きがかなりめんどうであった。しかし小林正成氏の努力で同書のコピーを入手できた。さらに、DYBOWSKI 蒐集，RADLIŃSKI の改編になるカムチャダル語の3方言，コリヤーク語の辞典のコピーも入手できた。小林正成氏に

対してこの機会に深甚の感謝の意を表明しておきたい。

6. DYBOWSKI はどのようにして北千島アイヌ語を調査したか

RADLIŃSKI(以下、**R** と省略することあり)によれば、1892年当時ルヴォフ(ドイツでは Lemberg という)市の大学で動物学の教授をしていた Benedykt DYBOWSKI は 1879~1883年の5年間カムチャツカで医師として勤務し、そのあいだに同地の諸民族に接することができた。人類学、民族学の資料のみならず相当の言語資料をもあつめた。まずロシア語で調査表(名詞、形容詞、動詞)をつくり、それに対応する土語の単語を書きこむ方法によって土民語の資料をあつめた。この書きこみは自分で行ったり、またロシア語を知る土民にも書かせた。そのようにしてカムチャダル語の3つの方言、アレウト語の2つの方言、コリャク語、クリル語(アイヌ語)の語彙集ができた(このうちわたしの手もとにないのはアレウト語の資料である)。これらの一連の労作の第1部が「シュムシュ島に住むアイヌの方言辞典」である。DYBOWSKI(以下、**D** と省略することがある)は土民のことばをロシア字で書きしるした。そこで**D**の辞典はロシア・アイヌ語辞典、ロシア・カムチャダル語辞典……であった。ところでこれらの資料を活字にして発表した宗教史学者**R**は次のような形のものに改めたのである。

1. ロシア・土民語辞典を土民語・ポーランド・ラテン語辞典に改めた(つまり、見出語には土民語をかかげている)。

2. ロシア字(キリル字)をローマ字(ラテン字)に改めた。ただし、もとのロシア字書きを括弧の中に入れてのこしておいた。

3. もと土民語の単語の意味はロシア語で示されてあつたが、**R**はポーランド語、ラテン語で示すようにした。

このような改変によって、**D**におけるとはちがった形のもののがうまれた。見出語をロシア語から土民語に改めたことによって、土民語の研究には便利となった。

ローマ字にうつすにあたり、ロシア字 e [je] は子音が先行しない場合は je と転写し、子音が先行する場合には 'e と表わした。またロシア語の母音 ѣ は y でうつし、子音字 ж は ž, ѱ は c, ѱ は č, ѱ は š とうつした。

R はクリル語彙集の成立についての **D** の記録を引用しているが、それによると、クリル語彙集はシュムシュ島出のクリル人について、その言語を調査して書きしるしたものである。クリル人は 1878~1882 年カムチャツカに滞在した (**D** のペトロバヴロフスク到着は 1879 年)。

太平洋に面するロシア領の沿岸貿易を管理していた露米会社はクリル諸島に事務所、狩猟所を設置していたが、そこで多数のアレウト人が労働者、狩猟者として働いていた。1875 年に千島・樺太交換条約が日露間に調印され、日本は樺太の一部に対する領土権を放棄するかわりにシュムシュ島をもふくめてウルプ及びその以北の島に対する領土権を獲得した。そこでロシア人は北千島から退くことになった。アレウト人はカムチャツカに移住することをのぞみ 1878 年秋にロシア政府によってカムチャツカのペトロバヴロフスクに送られた。アレウト人と一緒にクリル人(アイヌ人)の数家族もペトロバヴロフスクに送られた。アレウト人とクリル人とは翌年 1879 年ペトロバヴロフスクから 3 露里(1 露里=約 1 キロメートル)離れたアワチャ湾にのぞむシュログラツキ村(コサックの村、男 23 名、女 13 名)にうつった。アレウト人をさらにコマンドルスキー島に移す計画がたてられたとき、クリル人はアレウト人と同行することをのぞまず、シュムシュ島に帰るか、又は同島に近いところに住むことを望んだ。そこでカムチャツカ西岸南部のシュムシュ島に近いヤウィナ村に住むことになった。1881 年 3 月クリル人グループ(大人 6 名、そのほか乳幼児)がペトロバヴロフスクをはなれて 6 月にヤウィナ村に到着した。同地でシュムシュ島出のアイヌ人たちに出あい、1882 年春と一緒にシュムシュ島につれて帰る、という約束を得た。**D** は 1882 年の冬に彼らと会ったのが最後であった。後で彼らがシュムシュ島に安着したことを知ったという。

DYBOWSKI のシュムシュ島アイヌ語資料について (村山)

D がシュムシュ島出身のアイヌに接したのは 1879 年ペトロバヴロフスク付近のシェログラツキ村においてであり、最後に接触したのは 1882 年冬カムチャツカ南部西岸ヤウィナ [アイヌ語 *ya-wen*] 村においてであった。しかし調査は主としてクリルがアレウト人と一緒にいたころ、つまりシェログラツキ村で行なわれたようである。

D によれば、クリルの男たちはロシア語が話せたし、またアレウト語も知っていた。クリルの 1 人はロシア語を書くこともできた。他方アレウト人はクリル語ができ、アレウトの 1 人はかなり教養のたかい人物で、ロシア語がよくできた。このことは「私にとって一層有利であった」と **D** は述べている。

「先ず自分がクリルの単語を記録し、それからそれらをアレウト人に書きなおさせ、次いで私はクリル人たちの前で読み書きのできるクリル人に訂正させた。このようにしてクリル語彙集が出来あがったのである」と **D** はのべている (66 ページ)。

7. RADLIŃSKI の編さんについて

ラドリンスキーはドゥイボフスキー辞典 (原稿) の改编者であるが、**D** の原稿を読むばあいには個々の文字を読みちがえた例が少なくない。このことは、クラシェニンニコフの北千島アイヌ語資料、鳥居龍蔵氏の資料、その他のアイヌ語資料との比較からあきらかとなる。

また **R** が **D** のロシア語訳を誤ってポーランド語、ラテン語に訳した場合も、少数ながらみとめられる。以下に、**D** の原稿を **R** が誤り読んだと見られる例をかかげる (将来、**D** の原稿がなんらかの形でわれわれに提供されるならば、この誤読はたやすく実証されるとおもふ)。

	D の原稿の形 (推定) (括弧内は村山の転写)	R は次のように誤り読んだ (括弧内は村山の転写)
a を o と誤る	исамкан (isamkan) 亡ぼす апкасы (apkası) 入る	исомкан (isomkan) опкасы (opkası)
и を н と誤る	яи (yai) 自分 арсиискарири(arsiiskariri) 一度向きをかえる	ян (yan) арсинскарири (arsinskariri)
и を п と誤る	иририпий (iriripiy) イラクサ	пририкий (pririkiy)
и を с と誤る	туиромпий (tuirompiy) 胃	тусромпий (tusrompiy)
и を у と誤る	кумичи (kumiči)[私の]孫	кумучи (kumuči)
к を н と誤る	асикто (asikto) 誕生日	асинто (asinto)
к を п と誤る	окикарп (okikarp) えり тантоноский (tantonoskiy) 今日	опикарп (opikarp) тантоноспии (tantonospiy)
к を у と誤る	ксарумпий (ksarumpiy) 耳かざり	усарумпий (ysarumpiy)
н を и と誤る	исиокунри (isiokunri) 自慢する	исиокуири (isiokuiiri)
н を к と誤る	кунницыри (kunniciři) ふくろう нино (nino) うに танни (tanni) 白樺	кункицыри (kunkiciri) нико(niko) танки (tanki)
н を сс と誤る	аны置く	ассы (assi)
н を т と誤る	онуман晚い	онумут (onumut)
но を ю と誤る	пиркано койки (pirkano koyki) 優越する	пиркаю койки (pirkayu koyki)
о を а と誤る	ирона (irona<ironnu) 亡ぼす кондра (kondra) 氷 конкун (konkun) 羽 помпет (pompet) 小川 отоп (otop) 苔	ирана (irana) кандра (kandra) канкун (kankun) рампет (pampet) отап (otap)
п を к と誤る	иририпий (iriripiy) イラクサ	пририкий (pririkiy)

п を н と 誤る	анайкип (anaykip) 皆 иририп (iririp) イラクサ касकिп (kaskip) シャベル кексуп (keksup) 鷹 куйтуп (kuytup) 雁 куйтупигири (kuytupigiri) 雁 нистип (nistip) 固い сипайтва (sipaytva) 煙る тупич (tupič) 2	анайкин (anaykin) иририн (iririn) каскин (kaskin) кексун (keksun) куйтун (kuytun) куитунигири (kuytunigiri) нистин (nistin) синайтва (sinaytva) тунич (tunič)
р を н と 誤る	сиургур (siurgur) わし	сиургун (siurgun)
с を и と 誤る	усва (usva) 消える	уива (uiva)
т を к と 誤る	ритани (ritani) 白い木	рикани (rikani)
т を ш と 誤る	тапир (tapir) 肩胛骨 (т, шは筆記体は酷似)	шапир (šapir)
х を к と 誤る	хурычачу (xurīčaču) 赤い狐	курычачу (kuričaču)

8. わたしの転写

D-R のシュムシュ島アイヌ語方言辞典の日本語版をつくるにあたって、アイヌ語のローマ字の部分のままにしておきポーランド語、ラテン語訳を日本語になおすこともひとつの方法である。しかし、日本ではポーランドにおけるとはちがったローマ字の読み方が行なわれている。ヤ行音は **R** によって *ja, jo, ju*…とあらわされているが、日本では *ya, yo, yu*…とあらわすから、私は日本式をとることにする。そこで **R** が *j* であらわしている音をわたしは *y* であらわす。

また **R** は、子音が先行するばあいのロシア字 *e* をローマ字で '*e* とあらわしているが、わたしは単に *e* であらわす。これは北海道アイヌ語、カラフト・アイヌ語、鳥居龍蔵氏の北千島アイヌ語の語形と比較してみると、'(口蓋化を示すし) は不必要であることがわかるからである。子音字の後でロシア字 *e* (*je*) が書かれる場合と *ə* (*e*) が書かれる場合とで意味が区別される例が **D** の資料には見あたらない。子音字の後でロシア字 *e* が書かれるのが普通で、例外は *окээ* 「捨ててしまう」だけである。

つぎに、**D** のロシア字書きを **R** がどのように転写し、わたしがどのように転写するか、表にして示そう。

D (ロシア字)	R (ローマ字)	村山 (ローマ字)
а	<i>a</i>	<i>a</i>
б	<i>b</i>	<i>b</i>
в	<i>v</i>	<i>v</i>
г	<i>g</i>	<i>g</i>
д	<i>d</i>	<i>d</i>
е (子音が先行しない場合)	<i>je</i>	<i>ye</i>
(子音が先行する場合)	<i>'e</i>	<i>e</i>
ж	<i>z</i>	<i>z</i>
и	<i>i</i>	<i>i</i>
й	<i>j</i>	<i>y</i>
к	<i>k</i>	<i>k</i>
м	<i>m</i>	<i>m</i>
н	<i>n</i>	<i>n</i>
о	<i>o</i>	<i>o</i>
п	<i>p</i>	<i>p</i>
р	<i>r</i>	<i>r</i>
с	<i>s</i>	<i>s</i>
т	<i>t</i>	<i>t</i>
у	<i>u</i>	<i>u</i>
ф	<i>f</i>	<i>f</i>
х	<i>ch</i>	<i>x</i>
ц	<i>c</i>	<i>c</i>
ч	<i>č</i>	<i>č</i>
ш	<i>š</i>	<i>š</i>
ы	<i>y</i>	<i>i</i>
ь	<i>'</i>	<i>'</i>
э	<i>e</i>	<i>e</i>
ю	<i>ju</i>	<i>yu</i>
я	<i>ja</i>	<i>ya</i>

9. DYBOWSKI と鳥居龍蔵氏におけるアイヌ語の表わし方の比較

D と鳥居龍蔵氏とは次表からあきらかなように同一の方言をほぼ同一の時代に記録している。

調査に関する事項 \ 調査者	Dybowski (ポーランド医師, 動物学者)	鳥居龍蔵 (人類学者)
インフォーマントの出身地	シムシュ島	シムシュ島
インフォーマントが故郷を去つた時期	1878年	1884年
調査の場所	カムチャツカ, ペトロバヴロフスク付近	シコタン島
調査の時期	1879-1882年	1899年
調査単語数	約 1900語	700語
発表の時期	1892年	1903年
発表の場所	ポーランド, クラコウ	東京

しかし, 両者のアイヌ語のしるし方には次のような差異が見られる。

(a) *h-* の表記

鳥居氏において表記されている *h-* が DYBOWSKI において表記されていない例が多い。

DYBOWSKI	鳥居
<i>apu~aapu</i> 姉妹	<i>habo</i> 姉
<i>arkitek</i> 左手	<i>harikiteki</i> 左手
<i>arru</i> 百合の一種	<i>harm</i> ウバ百合
<i>oydus</i> 綱	<i>haitush</i> 綱
<i>opuni</i> 起きる	<i>hobuni</i> 起る
<i>ot</i> 20	<i>howát</i> 20

ただし DYBOWSKI がロシア字 *x* (ハ-) を以て *h-* をあらわしている場合もある。

DYBOWSKI	鳥居
<i>xorat ki</i> 揺れる	<i>hōrat</i> すべる
<i>xorka</i> 後ろへ	<i>horuka</i> うしろ

これらの例のほか、DYBOWSKI が *h-* を表記していない例として次のものを挙げることができる。

DYBOWSKI	参照
<i>ačiri</i> 投げおとす	<i>hacir</i> 落ちる (八, その他)
<i>ačkumkum</i> 蜘蛛	<i>hacikonkom</i> 蜘蛛 (樺)
<i>an^oko</i> 臍	<i>hanku</i> 臍 (八, その他)
<i>apurva</i> やわらかい	<i>hapur</i> 柔らかい (八, その他)
<i>avruy</i> < <i>av ruy</i> 声高い	<i>haw</i> 声 (八, その他)
<i>ečiruruy</i> < <i>ečiru ruy</i> こっけいな	<i>hecire</i> 遊ぶ (樺)
<i>ekay</i> 白髪の	<i>hekay</i> 年をとった (幌)
<i>oydus</i> < <i>ay-dus</i> 綱	<i>hay</i> 苧 (北海道, 樺太)
<i>oma</i> 魚卵	<i>homa</i> 魚卵 (宗)
<i>on'yu</i> 樵	<i>honiwe</i> 樵 (樺)
<i>orkiu</i> 狼	<i>horkew</i> 狼 (八, その他)
<i>osketkoman</i> 待つ	<i>hoski</i> 待つ (沙)
<i>oskoyen, oskoin</i> 以前に	<i>hoskino</i> 以前に (八)
<i>uyka</i> 焼く	<i>uhuyka</i> 燃やす (八)
<i>umki</i> 鳴る	<i>humi'iki</i> 鳴る (樺)
<i>upi</i> はれもの	<i>hup</i> はれもの (八)
<i>urai</i> 洗う	<i>huraye</i> 洗う (八)
<i>urerum</i> < <i>ure-erum</i> 赤いねずみ	<i>hure</i> 赤い (八)
<i>urikani</i> 銅	<i>hurekani</i> 銅 (八)

DYBOWSKI が *h* (*x*) を表記する例は、前記のもののほか、次のようなものがある。

DYBOWSKI

<i>xomakokorpa</i> 魚卵を塗る	<i>homa</i> 魚卵 (宗, その他)
<i>xoptek</i> 松の	<i>hup</i> とどまつ (八, その他)
<i>xorsiva</i> すっぱい	<i>horse</i> すっぱい (八, その他)
<i>xumkutiki</i> とどろく	} <i>hum</i> 音 (八, その他)
<i>xumruy</i> < <i>xum-ruy</i> 雷の	
<i>xurmaka</i> 嗅ぐ	<i>hura nu</i> 嗅ぐ (八)

(b) **D** における母音の表記の省略

DYBOWSKI においては、アクセントのない音節の母音が表記されない場合がある。たとえば

<i>ksarvasiki</i> こめかみ < <i>kisár-vasiki</i> (八, その他 <i>kisár</i> 耳)
<i>notkam</i> 頬 < <i>notakám</i> (八, その他 <i>notakám</i> 頬)
<i>stakiči</i> 犬のための桶 < <i>setá-kiči</i> (八, その他 <i>setá</i> 犬)

(c) 鳥居氏における余計な母音表記

鳥居氏においては母音が余計に表記される場合がある。

意 味	DYBOWSKI	鳥居	比較
7	<i>arvampiy</i>	<i>aruwanpe</i> <i>aruwampe</i>	八, その他 <i>arwanpe</i>
ゆ び	<i>askipit</i>	<i>ashikipit</i>	沙その他 <i>askepet</i>
怒 る	<i>iruska</i>	<i>irushika</i>	八, その他 <i>iruska</i>
か ら す	<i>paskur</i>	<i>pasukuru</i>	八, その他 <i>paskur</i>
夜	<i>sirkurka</i>	<i>shirekorak</i>	宗 <i>sirkunne</i>
あざらし	<i>tukvar</i>	<i>tukoro</i>	八, その他 <i>tukar</i>

10. クラシェニンニコフ, **DYBOWSKI**, 鳥居龍蔵の北千島アイヌ語の
語彙比較

北千島アイヌ語を調査した上記3人の資料によって次の比較表ができあ
がった。

	K	D	T
1 母～姉	<i>aapu</i> < <i>hápo</i> 母	<i>aapu, apu</i> < <i>hápo</i> 姉妹	<i>habo</i> 姉
2 矢	<i>achi</i> [<i>axi</i>] 矢	<i>ay</i>	<i>ai</i>
3 舌	<i>achu</i> [<i>axu</i>]	<i>av</i>	<i>auk^h</i>
4 人	<i>ainù</i>	<i>ayno, aino</i>	<i>aino</i>
5 あざらし	<i>amuspè</i>	<i>amospi</i>	
6 皆		<i>anaykip</i>	<i>anaikibi</i>
7 お 前	<i>e</i>	<i>ani</i> < <i>e'ani</i>	<i>ane</i> < <i>e'ani</i>
8 消し炭	<i>apauschat</i> [<i>apaušat</i>] < <i>api-ušat</i>	<i>usat</i> 炭	
9 火	<i>api</i>	<i>abi</i>	<i>abe</i>
10		<i>apui</i> 火の上に鍋 をかける道具	<i>aboi</i> 炉
11 坐 る		<i>apunua</i>	<i>abuna</i>
12 左 手		<i>arkitek</i> < <i>harki-tek</i>	<i>harikiteki</i>
13 ウバ百合		<i>arru</i> < <i>harru</i>	<i>haru</i>
14 7	<i>aruàn</i>	<i>arvampiy</i>	<i>aruwampe</i>
15 5	<i>asik</i>	<i>askini</i>	<i>ash'kimep</i> (マ マ)
16 ゆ び		<i>askipit</i>	<i>ashikibit</i>
17 樹 枝		<i>astiki</i> < <i>has-teki</i>	<i>hashiteki</i>
18 海	<i>atuikà</i>	<i>atuyka</i>	<i>atuika</i>
19 狐		<i>čaača</i>	<i>chauchau</i>
20 山		<i>čač'inčup</i> 山脈	<i>chacha</i> 高い山

DYBOWSKI のシュムシュ島アイヌ語資料について (村山)

	K	D	T
21 口	<i>tschar</i> [čar]	<i>čar</i>	<i>charo, charu</i>
22 走 る		<i>časi</i>	<i>chashi, chase</i>
23 唇	<i>tschaatoi</i> [čaatoi]	<i>čatvī, čatī</i>	<i>chātoi</i>
24 家	<i>tsche</i> [če]	<i>ce</i>	<i>ché</i> (家) <i>che</i> (小舎)
25 陰 茎	<i>tschi</i> [či]	<i>či</i>	
26 舟	<i>tschip</i> [čip]	<i>čip</i>	<i>chip</i>
27 鳥	<i>tschirpu</i> [čirpu] かも	<i>čir</i>	<i>chiri</i>
28 女 陰	<i>tschit</i> [čit]	<i>čit</i>	
29 箒		<i>cotuytuyn</i>	<i>shutuitui</i>
30 秋		<i>čukan</i>	<i>chukam</i>
31 太陽, 月	<i>tschuppū</i> [čuppū]	<i>cup, čup</i>	
32 黒 い	<i>ékuroko</i>	{ <i>ekurok</i> <i>ekorokpiy</i>	<i>ekoroku</i> <i>yekoroka</i>
33	<i>énumitanne</i> こけももに似 た漿果	<i>enumitanne</i> 漿果 (Ch, I 26 < e 頭 <i>numi</i> (の粒) <i>tanne</i> 長)	
34	<i>énumukuta</i> こけもも	<i>enumkatan</i> 漿果	
35 ナ イ フ	<i>epirà</i>	<i>epera</i>	<i>eperaniki</i>
36 顔		<i>erbu</i>	<i>erup</i>
37 鱈		<i>erikus</i>	<i>erekush</i>
38 鼠	<i>ermù</i>	<i>erumu</i>	<i>erum</i>
39 と ど	<i>etaspè</i>	<i>etispe</i>	
40 鼻	<i>etù</i>	<i>etu</i>	<i>etūani no</i> 尖りたる
41 アビ属の鳥	<i>étubirga</i> < <i>etu-pirka</i>	<i>etupirka</i>	
42 きたない		<i>icagaran</i>	<i>ichakkare</i>

		K	D	T
43	寒 い	<i>imeraiki</i> 寒い	<i>imereykiri</i> 凍える	<i>imaraikiri</i> 寒き
44	4	<i>inép</i>	<i>inip</i>	<i>inép</i>
45	14		<i>inip vampi kasma</i>	<i>inép wambe kasuma</i>
46	殺 す		<i>ironani</i> < <i>i-ronani</i>	<i>rona</i>
47	怒 る		<i>iruska</i>	<i>irushika</i>
48	干 す		<i>isatki</i> < <i>i-satki</i>	<i>sa'ke</i>
49	熱 い	<i>iseàsekka</i>	<i>sesik</i>	<i>iseseka</i>
50	一昨日		<i>isot numan</i>	<i>isaoto numan</i>
51	6	<i>ivàn</i>	<i>yevampiy</i> <i>ivanini</i> 6 個	<i>iwampe</i>
52	弟	<i>kaki</i> < <i>ku-aki</i>	<i>akipu</i>	<i>akibo</i>
53	肉	<i>kam</i>	<i>kam</i>	
54	熊	<i>kamùì</i>	<i>kimkam</i> < <i>kim-kamuy</i> (山・神)	
55	内 臓	<i>kanka</i>	<i>kankan</i>	
56	あ ら れ	<i>kaukàch</i>	<i>kavkav</i>	
57			<i>katunpuri</i> 喜ばせる	<i>katanoburu</i> 喜ぶ
58	あぶら (脂肪)		<i>ke</i>	<i>chepke</i> < <i>chep</i> <i>ke</i> 魚の油
59	足	<i>kemà</i>	<i>kema</i>	
60	星	<i>keta</i>	<i>keto</i>	<i>ketta</i>
61	鷹	<i>küksup</i>	<i>keksup</i>	<i>keik'sup</i>
62	話 す	<i>kitokrosiya</i> < <i>ku- itak-rusuy-wa</i>	<i>itaki</i>	
63	見 る	<i>kínkarva</i> < <i>ku- inkar-wa</i>	<i>in^okari</i>	<i>inkari</i>
64	靴	<i>kir</i>	<i>ker</i>	
65	桶	<i>kittschi</i> [<i>kitéi</i>]	<i>kiči</i>	

	K	D	T
66	兄	<i>kiupi</i> < <i>ku-yupi</i>	<i>ubu</i> < <i>hupu</i>
67	妻	<i>kmatschi</i> < <i>ku-mači</i>	<i>mat</i> <i>machi</i> 女, 妻
68	笑 う	<i>kméinua</i> < <i>ku-mina-wa</i>	<i>mina</i> <i>minā</i>
69	眠 る	<i>kmúkarva</i> < <i>ku-mokor-wa</i>	<i>mukari</i> <i>mokōro</i>
70	ひ き		<i>kokobo</i> < <i>kokka-pa</i> <i>kokopa</i> <i>kokka</i>
71	男	<i>kokaiò</i> < <i>ku-okayò</i> 夫	<i>okaybautari</i> 船人 <i>okkai</i> 若者, 男 < <i>okaybo-utari</i> 男たち
72	ひ じ		<i>komta</i> <i>komuta</i>
73	帽 子	<i>kontschi</i> [<i>konči</i>]	<i>konce, kondze</i>
74		<i>kotàn</i> 土地	<i>kotan</i> 島, 国 <i>kotan</i> 処, 村
75	息 子	<i>kpúhu</i> < <i>ku-póho</i>	<i>poo</i>
76	耳	<i>xar</i> [<i>ksar</i>] < <i>kisar</i>	<i>ksarvasiki</i> こめかみ < <i>kisar-vasiki</i> (耳・つけ根)
77	泣 く	<i>ktschischianva</i> < <i>ku-čiši-an-wa</i> 私泣いているよ	<i>čiši</i>
78	弓	<i>ku</i>	<i>ku</i> 小銃 <i>ku</i> 弓
79	さ お		<i>kumaki</i> <i>kuma</i>
80	召 使	<i>kusiuhè</i> < <i>ku-usiuhè</i>	<i>usiu</i>
81	牝		{ <i>mani</i> <i>manne</i> <i>manip</i>
82	冬		<i>matan</i> <i>mata, matam</i>
83	泉	<i>mem</i>	<i>memuyri</i> 泉の <i>mem</i>
84	父	<i>mítschi</i> [<i>míči</i>]	<i>miči, mici</i> <i>michi</i>

	K	D	T
85 草	<i>mun</i>	<i>mun</i>	<i>mun</i>
86 鎌		<i>munstap</i>	<i>moshitam</i>
87 否		<i>nepam</i> 否	<i>neben...</i> でない
88 貧しい		<i>nepeyekučur</i> 貧しい	<i>nebe</i> <i>yēgochakuru</i> 貧者
89 木	<i>ni</i>	<i>ni</i>	<i>ni</i>
90 木の葉	<i>niép</i>	<i>niyam</i>	<i>yam, niyam</i>
91 朝	<i>nisiàt</i>	<i>nisat</i>	
92 明日	<i>nisiaattà</i>	<i>nisat</i>	<i>nishatta</i>
93 空	<i>niss</i>	<i>nisar</i>	<i>nisaru</i>
94 固い		<i>nistip</i>	<i>nishite</i>
95 卵	<i>nóki</i>	<i>nok</i>	<i>nók</i> 鳥卵
96 曲がった		<i>noyki</i>	<i>noike</i> 曲る
97 母		<i>nonno</i>	<i>nonno</i>
98 まんなか		<i>noski</i>	<i>shinoshike</i> < <i>si-noske</i> 中
99 頬	<i>nutkichu</i> [<i>nutkixu</i>] (本来は「あご」)	<i>notkam</i>	<i>nota'kam</i>
100 涙		<i>nubi</i>	<i>nubi</i>
101 昨日	<i>nuumàn</i>	<i>numan</i>	<i>numan</i>
102 綱		<i>oydus</i> < <i>hay-tus</i>	<i>haitush</i>
103 ズボン	<i>oyo</i>	<i>oyo, oyoó</i>	
104 魚卵	<i>oma</i> < <i>homa</i>	<i>oma</i> < <i>homa</i>	<i>homa</i>
105 大腿		<i>omponi</i> < <i>om-poni</i> 大腿骨	<i>omunya</i> 大腿
106 小さい	<i>onnan-othùr</i> 丘 < <i>onono-ot-hur</i> 小さくある丘	<i>onono</i> 小さい	<i>onono</i> 小さい
107 おっとせい	<i>onnèp</i>	<i>onip</i>	

DYBOWSKI のシムシユ島アイヌ語資料について (村山)

	K	D	T
108	獵 する		<i>ontrupusi</i> 狩する <i>onrubusamna</i> 獵
109	夕 方	<i>onuumán</i>	<i>onumonan</i> 夕方に <i>onumanan</i>
110	起 きる		<i>opuni</i> < <i>hopuni</i> <i>hobuni</i>
111		<i>oramuà</i> < <i>oram-wa</i> 低い、	<i>oraun</i> 下から <i>rampiy</i> 低い
112	狼	<i>orgiu</i> < <i>horkiw</i>	<i>orkiu</i> < <i>horkiw</i>
113	山		<i>ostogoyka</i> 山岳の <i>shitokoi</i> 山の <i>shitoko'i</i> 山の
114	20		<i>ot</i> < <i>hot</i> <i>howát</i>
115	砂	<i>otà</i>	<i>ota</i> <i>ota</i>
116	尾	<i>otschontschò</i> [<i>očončò</i>]	<i>očenčo</i>
117	深 い		<i>ova</i> <i>ō</i>
118	頭	<i>paòt</i>	<i>pa</i>
119	鳥	<i>páskur</i>	<i>paskur</i> <i>pasukuru</i>
120	さ じ	<i>pasùì</i>	<i>pasiu</i> <i>pashui</i>
121	川	<i>pet</i>	<i>pet</i> <i>pet</i>
122	水	<i>pi</i>	<i>pe</i> <i>peh</i>
123	肥 えた		<i>piip</i> 肥えた <i>pian</i> ふとる
124	岩		<i>pira</i> <i>pira</i>
125	石	<i>poinà</i>	<i>poyna</i> <i>poina</i>
126	小 さい	<i>pōngapif</i> < <i>pon-kapif</i> 小かもめ	<i>pon</i> 小さい
127	大 きい	<i>porogò</i> [<i>poroho</i>]	<i>porop</i> <i>porohu</i>
128	腹 ~ 胃	<i>pse</i> < <i>pisé</i> 腹	<i>pse</i> < <i>pisé</i> 胃
129	子	<i>pùmpu</i> < <i>pon-po</i> 子	<i>poo</i> 息子
130	虹		<i>rainci</i> <i>rayunchi</i>

		K	D	T
131	死ぬ	<i>raiua</i> < <i>rai-wa</i> 死せる		<i>rai</i> 死ぬ
132	ラッコ	<i>rakkû</i>	<i>raku</i>	<i>rakko</i>
133	胸	<i>ramutûr</i> < <i>ramu-utur</i>	<i>ramka</i>	
134	肩		<i>rar</i>	<i>raru</i>
135	13	<i>rèepitsch- ikasmua</i>		<i>rëbichi wambe kasuma</i>
136	風	<i>reerà</i>	<i>rer</i>	<i>réra</i>
137	ひげ	<i>trek</i> [<i>rek</i>]	<i>reki</i>	<i>reki</i>
138	3	<i>rep</i>	<i>ribič</i>	<i>rëbichi</i>
139	白い	<i>retanoo</i> < <i>retar-no</i>	<i>tetar</i> <i>retaceri</i> < <i>retatciri</i> < <i>retar-ciri</i> 白鳥	<i>retara</i>
140	あざらし	<i>retatkor</i> < <i>retar-tukar</i> 白いあざらし	<i>tukyar</i>	<i>tukoro</i>
141	泊る		<i>revsi</i>	<i>esukoriushi</i> < <i>esuko-riushi</i>
142	高い	<i>triiva</i> < <i>rii-wa</i>	<i>ribi</i>	<i>ri</i>
143	鯨	<i>rika</i>	<i>rik</i>	<i>rika</i>
144	湿った	<i>rikanua</i> < <i>rikan-wa</i>	<i>rikanka</i> 湿らす	<i>rikan</i> 濡れた所
145	波		<i>rir</i>	<i>rir</i> さざなみ
146	道	<i>ru</i>	<i>ru</i>	
147	裸		<i>rutapkur</i> 裸の	<i>rut apuchi</i> 裸なる
148	心臓	<i>sampe</i>	<i>sampiy</i>	
149	こんぶ	[<i>ktu</i>] <i>sas</i> [棒]こんぶ	<i>sas</i>	<i>sasunu</i>
150	耳		<i>satapa</i>	<i>satapa</i>

DYBOWSKI のシムシュ島アイヌ語資料について (村山)

	K	D	T
151 乾いた	<i>sáthua</i> < <i>sat-wa</i>	<i>satik</i>	<i>an sar'ke</i> 干す
152 櫓	<i>schkeni</i> [<i>škeni</i>] < <i>sike-ni</i>	<i>skini</i>	
153	<i>siitschip</i> < <i>sičip</i> 赤い魚	<i>sičip</i> 鮭	<i>shichep</i> 鮭
154 あび (鳥)	<i>ses</i>	<i>ses</i>	
155	<i>siakipa</i> 鱒	<i>sakibi</i> 鮭	<i>sakibe</i> 鰻
156 目	<i>sik</i>	<i>sik</i>	<i>shiki</i>
157 生きている	<i>siknuua</i> < <i>siknu-wa</i>	<i>siknupkiva</i> < <i>siknu-p-ki-va</i>	
158 1	<i>sinèp</i>	<i>sinip</i>	<i>shiné</i>
159 9	<i>sinèpis</i>	<i>sinib sampiy</i>	<i>shinibe sampe</i>
160 11	<i>sinèp-ikasmua</i>	<i>sinip vampikasma</i>	<i>shiné vambe</i> <i>kasuma</i>
161 明るい	<i>sirbikirua</i> < <i>sirpikir-wa</i>		<i>shiripepere</i> (<i>shiripekere</i> の誤記か)
162 夜	<i>siri kuruko</i> 暗い	<i>sirkurka</i> 夜	<i>shirekorak</i> 夜
163 雨	<i>sirugèn</i>		<i>shiriwin</i>
164 右手		<i>sitek</i> < <i>si-tek</i>	<i>shiteki</i> < <i>shi-teki</i>
165 煙	<i>siupuja</i>	<i>sibay</i>	
166 弱い		{ <i>siventiy</i> 不器用な <i>siventip</i> 無力な	<i>shiuente kuru</i> 弱き <i>shiunte</i> 弱き
167 掃く		<i>sotuytuy</i>	<i>sotuitui</i>
168 犬	<i>stapù</i> < <i>seta-po</i>	<i>sta</i> < <i>setá</i>	<i>seta</i>
169 山		<i>stogoy</i>	<i>shitokoi</i> 山の
170 鷺	<i>surgùr</i>	<i>siurgur</i>	<i>shurukuru</i>
171 柳	<i>susu</i>	<i>susu</i>	<i>shu' shu</i>

		K	D	T
172	今 日	<i>tani</i>	<i>tanto</i>	<i>tani</i> 今
173	彼 処		<i>tanita</i>	<i>tamte</i>
174	貂	<i>tannerum</i> < <i>tanne-erum</i>	<i>tannerum</i>	
175	白 樺	<i>tanni</i> < <i>tat-ni</i>	<i>tani</i> < <i>tanni</i>	
176	肩	<i>tapsut</i>	<i>tapko</i> < <i>tapkew</i>	
177	霜		<i>taskur</i>	<i>tasukuru</i>
178	翼	<i>teikùp</i>	<i>tekup</i>	<i>tekubu</i>
179	手	<i>tek</i>	<i>tek</i>	<i>teké</i>
180	掌		<i>tekor</i>	<i>tekuwaru</i>
181	此 処 に		<i>tentit</i>	<i>techida</i>
182	跳 ね る		<i>terki</i> 跳ねる	<i>teriké</i> とびこえる
183	緑	<i>teuninua</i> < <i>teunin-wa</i>	<i>teonatarp</i> < <i>teuna-tar-p</i>	
184	湖	<i>to</i>	<i>to</i>	<i>to</i>
185	日	<i>to</i>		<i>tō nan</i> 昼
186	し ら み		<i>toxtok</i>	<i>tok'tok</i>
187		<i>tono</i> 主人	<i>cup tono</i> 王	
188	乳	<i>toopì</i>	<i>tope</i>	
189	8	<i>tubis</i>	<i>tupsampiy</i>	<i>dobisampe</i>
190	12	<i>tuupitschi</i> <i>ikasmua</i>	<i>tubičyampikasma</i>	<i>dōbechi vambe</i> <i>kasuma</i>
191	腹		<i>tuy</i>	<i>tui</i>
192	あざらし		<i>tukvar</i>	<i>tukoro</i>
193	腰		<i>tumama</i>	<i>tumom</i>
194	とび散る		<i>tursi</i> 飛び去った	<i>turushi</i> 散る
195	悪 魔	<i>uin-kamui</i>	<i>ven^gkamuy</i>	
196	斧	<i>ukàr</i>	<i>mukar</i>	

DYBOWSKI のシムシユ島アイヌ語資料について (村山)

	K	D	T
197 音	<i>um</i> < <i>hum</i> かみなり	<i>umki</i> < <i>hum-ki</i> 鳴りひびく	<i>hum</i> 音
198 夜 中	<i>upakannoschki</i> < <i>upakan-noški</i>	<i>upoknoski</i>	<i>ubananochike</i>
199 雪	<i>upasch</i> [<i>upaš</i>]	<i>upas</i>	<i>ubashi, ubasu</i>
200 着 物	<i>ur</i>	<i>ur</i>	<i>uru</i>
201		<i>urayasii</i> ヤナを編む	<i>urai</i> ヤナ
202 戦 う		<i>urayki kori</i>	<i>uraiki</i>
203 召 使	<i>usichu</i>	<i>usiu</i>	
204	<i>uuràr</i> 雲	<i>urar</i> 霧	<i>urarube</i> 霧
205	<i>yaičir</i> 鴨	<i>yeyčir</i> 鶺か? (?は原文のもの)	
206		<i>xorat ki</i> 揺れる	<i>hōrat</i> すべる
207		<i>xorka</i> 後ろへ	<i>horuka</i> うしろ
208 商 人		<i>yeksisam</i> < <i>ihoku sisam</i>	<i>yoku shisam</i>
209 休息する		<i>yesika</i>	<i>eishika, eshiku</i>

11. DYBOWSKI および鳥居龍蔵資料におけるロシア語からの借用語

DYBOWSKI においては、次のようなロシア語からの借用語が見られる。

- čaj* 茶 < чай チャイ 茶
čajnik 湯沸し < чайник チャイニク 湯沸し
samok 鍵 < замок ザモク 錠前
karop 籠 < короб コロブ 籠
kermen ひうち石 < камень クレメン ひうち石
toxne 毛深い < мохнаты モフナテ 毛深い
okno 窓 < окно オクノ 窓

鳥居氏の採集した約700余の北千島アイヌ語単語には *rosót* 「馬」
〈лошадь, *shipenet* 「鉛」〈свинец, *sukodena* (正しくは *skotena)* 「牛」
скотинный [*skotinnoy*] 「家畜の」の3つがあるにすぎないようである。

12. アイヌ語からロシア語に入った1単語について

わたしの知るかぎり、ロシア語がアイヌ語からひとつの単語をとり入れて
いることを指摘したロシア人も日本人もいない。

クラシェンニコフの「カムチャツカ地誌」(ペテルブルグ, 1755年)
第3部185~188には「クリル語 [シムシュ, ポロムシル島アイヌ語]
の単語集」が示されているが、188ページに *уриль* [ロシア語「鵜」] *уриль*
[クリル語「鵜」]とある(S. MURAYAMA, *Ainu in Kamchatka, BULLETIN*
OF THE FACULTY OF LITERATURE KYUSHU UNIVERSITY, No.
12, p. 76 参照)。

さてロシア語の *уриль* 「鵜」は有名なグーリ辞典(わたしの手許にあ
るのは1882年発行されたその第2版)には次のようにある(508ページ)。
Уриль м. морская птица Phalacrocorax pelagicus, видъ баклана.
(男性名詞. 海鳥 *Phalacrocorax pelagicus*, 鵜の一種)

1969年9月3日付井桁貞敏氏からのお報せによれば、パヴロフスキーの
露独辞典にはこのロシア語に対して、*Phalacrocorax. Seerabe* (鵜)
という訳が付されている、という。これはあきらかにグーリ辞典からとっ
たものである。

さて、クラシェンニコフによれば、「鵜」をあらわすロシア語単語と
クリル語単語とはまったくおなじである。そこで、「鵜」をあらわすこの
語形がロシア語からクリル語に入ったか、それとも方向が逆であるか、と
いう問題がおこる。

知里真志保氏の遺稿「分類アイヌ語辞典」第二巻、動物篇, p. 205-206
には次の記事がある。

「う科

Phalacrocoracidae

§ 355. ウノドリ; 鶺

ウミウ (*Phalacrocorax capillatus* (TEMMINCK & SCHLEGEL) もヒメウ (*P. pelagicus*) も区別せずに urir 或は hurir とよぶようだ.

(1) urír (ウリリ) 《H. 一般》〔Hは北海道のこと〕

(2) hurír (フリリ) 《ビホロ》

(3) ká-urir (カウリリ) 《知日235》

補註知床日誌に次のような記事がある。「其(岩洞)中にカウリリと言う鳥有. 氷に泛ぶ事小鴨の如く, ……此三四丁のみに群飛し, ……此鳥を土人は血道の薬也と云へし. この ka-urir はヒメウをさすか。」

北海道一般に行なわれている *urir* 「鶺」は樺太アイヌ語では *uriri* としてドプロトウォルスキー辞典に採録され, 「名詞. 鶺 *uril* (黒い海鳥で, 首が長い)」と説明してある.

クラシェニンニコフは, クリル語〔アイヌ語〕の形として *uril* としているが, これは北海道, 樺太の語形から見て *urir* であったと推定される. ロシア人と接触せず従ってロシア語からの借用が行なわれ得ない北海道のアイヌ語において *urir* がひろまっていることから見て, *urir* はもともとアイヌ語であったと見ることができる.

わたしの見るところでは, ロシア語 *уриль* はもともとカムチャツカのコサック (ロシア人) の方言であろう. そしてコサックはカムチャツカ南部においてアイヌと接して, この鳥名をアイヌ語からとり入れたのであろう. 問題はアイヌ語の *urir* がロシア語で *уриль* (*uril*) となっている点である.

アイヌが古くから貿易や通婚を行っていた西カムチャダル人の言語には *urilen* 「海鳥, *Phalacrocorax pelagicus* (鶺)」という単語がある (DYBOWSKI-RADLIŃSKI の「西カムチャダル方言辞典」, 科学アカデミー紀要, フィロロギー部, クラコウ 1893 年による). この単語は南カムチャダル方言辞典, カムチャツカ河流域カムチャダル方言辞典には見えない.

西カムチャダル語の *urilen* は多分 *uril-en* という構成で、この *uril-* はアイヌ語 *urir* からの借用であろう。

わたしの手もとには、ロシア語 *урилъ* の分布地域に関する資料が存在しないので、きわめて断定的な結論はひき出せないが、今後、それが18世紀前半にカムチャツカに分布していたことが証明されるならば、アイヌ語 *urir* > ロシア語 *урилъ* という事実がたしかめられるわけである。

13. 北千島アイヌ語と樺太アイヌ語との共通単語

北千島はカラフトからきわめてとおくへだたっている。ところが以下のリストがしめしているように、北千島アイヌ語とカラフト・アイヌ語に共通の単語が少なくないのは注目される。

北千島アイヌ語(DYBOWSKI)	カラフト・アイヌ語	北海道方言
<i>ačkumkum</i> < <i>hačkumkum</i> 蜘蛛	<i>hacikonkom</i> 蜘蛛	宗 <i>hacikonkon</i>
<i>amospi</i> あざらし	<i>amospe</i> あざらし	
<i>av</i> 舌	<i>aw</i>	宗 <i>aw</i>
<i>casi</i> 走る	<i>cas</i>	美 <i>cas</i>
<i>čatvi</i> < <i>cátoy</i> 唇	<i>caatoy</i>	
<i>em</i> < <i>hem</i> 否定副詞	<i>ham</i> 否定副詞	
<i>erari</i> < <i>herari</i> かがむ	<i>herari</i> かがむ	
<i>inui</i> < <i>inuye</i> 着色する	<i>inuye aynu</i> いれずみする人	
<i>iska</i> 盗む	<i>iska</i>	美 <i>iska</i>
<i>kanačasriki</i> < <i>kan-ča-us-reki</i> 口ひげ	<i>kanca'uspe</i> 口ひげ	
<i>ke</i> 脂肪	<i>kee</i>	
<i>keto</i> 星	<i>keta</i>	宗 <i>keta</i>
<i>koikuy</i> 大シギ (鳥)	<i>kuykuy</i> シギの類 (シラウラ, タライカ) 知里	
<i>kon²kon</i> 羽	<i>konkon</i>	美 <i>konkon</i>

DYBOWSKI のシムシム島アイヌ語資料について (村山)

<i>ktusas</i> < <i>kutû-sas</i> 大昆布 (クラシェニンニコフ)	<i>kutû-sas</i> 円棒・昆布 (真岡)知里	
<i>kumuči</i> < <i>ku-miči</i> (私の)孫	<i>miči</i> 孫(カラフト)知里	
<i>kai</i> 松(クラシェニンニコフ)	<i>kuy</i> グイマツ (千島, 樺太)知里	
<i>masar</i> 猫	<i>masara</i> 猫 (ドプロトウォルスキー)	
<i>munstap</i> 鎌(鳥居 <i>moshitam</i>)	<i>moositam</i> 鎌	
<i>niyam</i> 木の葉	<i>ni-yam</i> 葉(カラフト)知里	
<i>nonno</i> 母	<i>nánna</i> 母(カラフト)知里	
<i>nuyanuya</i> 揉む	<i>nuya-nuyà</i> (髪・衣などを)揉む (ドプロトウォルスキー)	
<i>onip</i> おっとせい	<i>onnep</i> おっとせい (タライカ)知里	
<i>oma</i> < <i>homa</i> 魚卵	<i>homa</i> 魚卵	宗 <i>homa</i>
<i>onkirat</i> 痰	<i>onkenrah</i> 痰	宗 <i>onke rat</i> 美 <i>omkerat</i>
<i>oykinani</i> < <i>oyakin ani</i> 運びうつす	<i>oyakine</i> } わきの方へ <i>oyakene</i> }	{ 名 <i>oyakun</i> <i>anu</i> 退ける 宗 <i>oyakene</i> <i>ani</i> 退ける
<i>oyo, oyoo</i> ズボン	<i>oyoo</i> さるまた	
<i>piip</i> < <i>piip-p</i> 肥えた	<i>piye</i> 肥える <i>pie, p'ye</i> 肥えた	
<i>sas</i> 昆布	<i>sas</i>	宗 } <i>sas</i> 名 }
<i>ses</i> アビ属(鳥)	<i>ses</i> あいさ (タラントマリ)知里	
<i>sirororki</i> < <i>sirar-oriki</i> 満潮	<i>oroke</i> 潮が満ちる <i>oroke</i> (ドプロトウォルスキー) (水が)ます, あげ潮	八 <i>sirar pes</i> 潮が満ちる
<i>tanni</i> < <i>tat-ni</i> 白樺	<i>tax</i> < <i>tat</i> シラカンバ(樹皮) (白浦, 真岡, 鵜域)知里	

urak 肝臓

uraka

uráka(魚の)肝臓(シラウラ)知里

vaya ぶらつく

wa 渡渉

(ドブプロトウォルスキ)

14. 北千島アイヌ語について

クラシェニンニコフ, DYBOWSKI, 鳥居龍蔵氏の資料によって, 北千島アイヌ語に見られる諸現象, 特徴についてのべてみたい。

(a) 音 韻 変 化

イ. 特定の環境における子音の変化

北千島アイヌ語においては, 次の音韻変化がみとめられる。

$r-r > n-r$

「眠る」(dormire) *kmókonrosiva* < *ku-mokor-rusuy-wa*

私 眠り たい よ

(K)

matkonresi < *mat-kor-rusuy* 「結婚の世話をする」

妻 持ち たい (「結婚したい」)

(D)

$r-t > t-t$

mukata < *mukatta* < *mukar-ta* 「斧の柄」

(D)

$r-c > t-c$

retaceri < *retatceri* < *retar-ciri* 「白鳥」

(D)

$r-v > n-v$

an^skanveni < *an-kar veni* 「傷つける」

(「為された悪いこと」)

(D)

$t-n > n-n$

manne < *mat-ne* 「雌」

(T)

mani < *manne* < *mat-ne* 「雌」

(D)

tanni < *tat-ni* しらかば

(K)

ロ. 合成語における母音消滅

合成語において2つの母音が隣接する場合、最初の母音が消えるのが普通のものである (知里真志保, アイヌ語入門, p. 160 参照).

D には次のような場合が見出される.

<i>ani-oman</i> > <i>anoman</i>	運ぶ
<i>aynu-ikiri</i> > <i>aynikiri</i>	大勢の
<i>či-okay</i> > <i>čokay</i>	我々
<i>e-ani</i> > <i>ani</i>	お前
<i>eči-okay</i> > <i>ečokay</i>	お前たち
<i>i-ni-un-pe-usi</i> > <i>inumpesi</i>	タールを塗る (木の水・塗る)
<i>kema-o</i> > <i>kemo</i>	ひずめ
<i>ku-ani</i> > <i>koni</i>	私 (<i>kani</i> の誤読)
<i>ne-anaykip</i> > <i>nanaykip</i>	各々でない
<i>numa-us</i> > <i>numus</i>	もじゃもじゃ毛の

クラシェニニコフの資料からは次の例をあげることができる.

<i>kaki</i> < <i>ku-aki</i>	[私の] 弟
<i>kani</i> < <i>ku-ani</i>	私
<i>kokaiò</i> < <i>ku-okaio</i>	[私の] 夫
<i>kitokrosiva</i> < <i>ku-itak-rusuy-wa</i>	話す (私 話したいよ)

ただし、次の **D** の例は一般傾向からはずれている.

<i>ani-oman</i> > <i>animan</i>	運ぶ
<i>etu-omu</i> > <i>etumu</i>	鼻風邪

(b) 代 名 詞

推定される形 北海道

樺太

	K	D	T	推定される形	北海道	樺太
私	<i>kāni</i> < <i>ku-ani</i>		<i>kani</i> < <i>kuani</i>	<i>ku'ani</i>	八、その他 <i>ku'ani</i>	<i>ku'ani</i> <i>anoka</i> (老)
お前	<i>e</i>	<i>ani</i> < <i>e-ani</i>	<i>ane</i> < <i>e-ani</i> <i>āni</i> < <i>e-āni</i> <i>e</i>	<i>e'ani</i>	八、その他 <i>e'ani</i>	<i>e'ani</i> <i>e'co'oka</i> <i>e'ci'oka</i> (老)
彼			<i>tan guru</i> < <i>to'an kur</i>	八、その他 <i>to'ānkur</i>		<i>tātan aynu</i> <i>tara aynu</i> (老)
私たち		<i>čokay</i> < <i>či-okay</i>	<i>ini</i>	<i>či'okay</i>	八、その他 <i>ci'okay</i> (除外形)	<i>anoka</i> <i>anokayahcin</i> (老) <i>co'okayahcin</i> (老, 稀)
お前たち		<i>ečokay</i> < <i>eci-okay</i>	<i>ečhoka</i>	<i>eci'okay</i>	八、その他 <i>eci'okay</i>	<i>eco'oka</i> <i>eci'okayahcin</i> (老)
彼ら			<i>tairikichi</i> <i>guru</i>		八、その他 <i>to'ānkur utar</i>	<i>tā'anoka aynu'utah</i> <i>taranoka aynu'utah</i>

(c) 「人 称 形」

K においては次の形が見られる。

- 息 子 *kpúhu* < *ku-po-ho* (私の息子) 八, その他 *pó*, (*ho*)
 娘 *kpommatschi* < *ku-pon-mači* (私の娘) *mači* は *mat* の「人称形」
 兄 *kiupi* < *ku-yup-i* (私の兄) *yupi* は *yup* の「人称形」
 弟 *kaki* < *ku-ak-i* (私の弟) *aki* は *ak* の「人称形」
 姉 *ksa* < *ku-sa* (私の姉) 恐らく *ksa* は *ksā* 又は
ksaha を表わすであろう
 夫 *kokaiò* < *ku-okay-o* (私の男) *okayo* は「人称形」
 (Ch. III 466 参照)
 妻 *kmatschi* < *ku-mači* (私の妻) *mači* は *mat* の「人称形」
 召使女 *kusiuhè* < *ku-usiw-hè* (私の召使) *usiwhe* は *usiw*
 の「人称形」

次の語形は人称形と関係あるまい。

- あられ *kaukàch* [*kaukax*] (北海道 *kawkaw*)
 太陽, 月 *tschuppù* [*čuppù*]
 召 使 *usíchu* [*usíxu*] (北海道 *ussiw*)
 矢 *áchi* [*áxi*] (北海道 *ay*)
 頬 *nutkichu* [*nutkixu*] (八 *notkew* 「あご」)

「膀胱」 *psèchtschingytschu* (*psèxčingyčú*) はおそらく *psèch-
tschingychu* (*psèxčingyxu*) の誤記であり, *piséhe činkew-hu* と解され
 る。つまり「彼の腹の根元」の意であろうか。

D においては「人称形」は次のようにあらわされる。

- ekuku* 媒 妁 人 < *e-kok-o* (お前の・むこ)
ekugu 母の兄弟の息子 < *e-kok-o*
ekosmači 姪 < *e-kosmači* (お前の・よめ)
kosmači は *kosmat* の「人称形」
epomoč 娘 < *e-pomoč* < *e-ponmači* (お前の娘)
ponmači は *ponmat* の「人称形」

(D) 数 詞

DYBOWSKI (D) の数詞をクラシェニンコフ (K) 及び鳥居龍藏氏 (T) の資料と比較して見る。

	D	K	T
1	<i>sinip</i>	<i>sinèp</i>	<i>shiné</i>
2	<i>tubič</i>	<i>túup</i>	<i>dōbechi</i>
3	<i>ribči</i>	<i>rep</i>	<i>rēbichi</i>
4	<i>inip</i> <i>inini</i> 4個	<i>inèp</i>	<i>inep</i>
5	<i>askinip</i> <i>askinini</i> 5個	<i>asik</i>	<i>ash'kimep</i>
6	<i>yevampiy</i> <i>ivanini</i> 6個	<i>ivàn</i>	<i>iwampe</i>
7	<i>aryampiy</i> <i>aryanini</i> 7個	<i>aruàn</i>	<i>aruwampe</i>
8	<i>tupsampiy</i> <i>tupsanini</i> 8個	<i>tubìs</i>	<i>dobisampe</i>
9	<i>sinip sampiy</i>	<i>sinepìs</i>	<i>shinibesampe</i>
10	<i>vampiy</i>	<i>uupìs</i>	<i>vambe</i>
11	<i>sinip vampikasma</i>	<i>sinèp-ikasmua</i>	<i>shiné wambe kasuma</i>
12	<i>tubič vampikasma</i>	<i>tuupitschi ikasmua</i>	<i>dōbechi vambe kasuma</i>
13	<i>ribič vampikasma</i>	<i>reepitsch-ikasmua</i>	<i>rēbichi vambe kasuma</i>
14			<i>inep</i> " "
15			<i>ash'kinep</i> " "
16			<i>iwampe</i> " "
17			<i>aruwampe</i> " "
18			<i>dobisampe</i> " "
19	<i>sinip sampiy</i> <i>vampikasma</i>	<i>sinèpisan-ikasmua</i>	<i>shinibesampe vambe</i> <i>kasuma</i>
20	<i>ot<hot*</i>	<i>tuámpe</i>	<i>howát<hot</i>

金田一・知里, アイヌ語法概説(1936) p. 60 (括弧内は名詞形)

北海道	樺太 (アイヌ語方言辞典)
<i>shine</i> (<i>shinep</i>)	
<i>tu</i> (<i>tup</i>)	
<i>re</i> (<i>rep</i>)	
<i>ine</i> (<i>inep</i>)	
<i>inen</i> 4人	
<i>ashikne</i> (<i>ashiknep</i>)	
<i>ashiknen</i> 5人	
<i>iwan</i> (<i>iwampe</i>)	
<i>iwanu</i> 6人	
<i>arwan</i> (<i>arwampe</i>)	
<i>arwanu</i> 7人	
<i>tupesan</i> (<i>tupesampe</i>)	
<i>tupesaniu</i> 8人	
<i>shinepesan</i> (<i>shinepesampe</i>)	
<i>wan</i> (<i>wampe</i>)	<i>vanpe</i>
<i>shine ikashma wan</i> (<i>shinep ikashma wampe</i>)	<i>sineh ikasma wanpe</i>
<i>tu ikashma wan</i>	<i>tuh ikasma wanpe</i>
<i>re ikashma wan</i>	<i>reh ikasma wanpe</i>
<i>ine ikashma wan</i>	
<i>ashikne ikashma wan</i>	
<i>iwan ikashma wan</i>	
<i>arwan ikashma wan</i>	
<i>tupesan ikashma wan</i>	
<i>shinepesan ikashma wan</i>	
<i>hotne</i> (<i>hot</i>)	<i>tukunkutu</i> <i>hohne</i> (老人)

	D	K	T
第 20	<i>vampiy vampikasma</i>		
30	<i>vampiriot</i> < <i>vampi re-hot</i>	<i>revampè</i>	<i>wambe tòt</i> < <i>tu-hot</i>
40	<i>vampitoot</i> < <i>vampi tu-hot</i>	<i>inevampè</i>	<i>to wát</i>
50		<i>asiknevampè</i>	<i>wambe ereót</i>
60		<i>ivanuampè</i>	<i>inát</i>
70		<i>arvanyampè</i>	<i>wambe a'sh keneót</i>
80	<i>tupsen</i>	<i>tubisanvampè</i>	<i>ash' kine'at</i>
90		<i>sinepisanvampè</i>	<i>wambe ēwanhót</i>
100	<i>askinot</i> < <i>askine-hot</i>	<i>uànvampe</i>	
200		<i>tuánvampe</i>	
1000	<i>ivanot</i> < <i>ivan-hot</i>	<i>uànotnevampe</i>	
2000		<i>tuànotnevampe</i>	
10000		<i>tévanonnevampe</i>	

**onetosext*<*hotne-to-sext* 約 20 日

参照

北海道

樺太 (アイヌ語方言辞典)

<i>wan-e-tu-hotne (wampe-e-tu-hot)</i>	<i>rekunkutu</i>
<i>tu-hotne (tu-hot)</i>	<i>iinekunkutu</i>
<i>wan-e-re-hotne (wampe-e-re-hot)</i>	<i>asnekunkutu</i>
<i>re-hotne (re-hot)</i>	<i>iwankunkutu</i>
<i>wan-e-ine-hotne (wampe-e-ine-hot)</i>	<i>arawankunkutu</i>
<i>ine-hotne (ine-hot)</i>	<i>tupesankunkutu</i>
<i>wan-e-ashikne-hotne (wampe-e-ashikne-hot)</i>	<i>sinepisan-kunkutu</i>
<i>ashikne-hotne (ashikne-hot)</i>	<i>sinetanku</i> (満州語 <i>tanggū</i> 100)
	<i>tutanku</i>
	<i>sinewantanku</i>
	<i>tuwantanku</i>

1～9 までは北千島アイヌ語は他のアイヌ方言と異なるところはない。

11～19 においては、北千島アイヌ語は1位数・10・余りという構成をもち、この点1位数・余り・10という構成をもつ北海道、樺太方言と異なっている。この点が北千島方言の数詞の特徴のひとつである。

10位数では20は**K**のみは2・10であるが、**D, T**は *hot* であって、他方言と合致する。**K**では10位数は10進法 (decimal system) であって、これは樺太アイヌ語と合致する。樺太アイヌ語はどの調査者によっても10進法である (鳥居氏が北千島アイヌを調査した同じ年、1899年に樺太南東海岸で調査した Berthold Laufer の資料でも20～90までの10位数は2～9を表わすことばに *kankutu* がついてできている。Journal of the American Oriental Society, Vol. 37, p. 195 参照。ドプロトウオルスキーでも同じである)。これに反して**D, T**は**K**と合致していない点から、**K**は人為的な10位数をしるしたのではないか、という疑いものこる。ただし、**K**の接したアイヌはカムチャダルとかなり活潑に通商を行なっていたから、カムチャダル人の言語の影響をうけて10進法を用いていたかも知れない。30～90までは、北千島アイヌ語も本来は次のような数詞をもっていたと推定できよう。(Dには混乱が見られる。)

30 *wanpe-e-tu-hot*

40 *tu hot*

50 *wanpe-e-re-hot*

60 *re-hot*

70 *wanpe-e-ine-hot*

80 *ine-hot*

90 *wanpe-e-asikne-hot*

また100は *asikne-hot* であった。

(e) 動 詞

イ. 人称による活用形

動詞の人称による活用形は **D** には見られない. **T** にも *koman* < *ku-oman* 「私が行く」, *e kon rusui* < *e kor rusui* 「お前は持つことを欲する」という形が見られるだけである.

K には次のような形が見られる (左側はラテン語)

- | | | |
|----------------|-----------|---|
| (1) Dormio | (私は眠る) | <i>Kmúkurua</i> < <i>ku-mokor-va</i>
私は 眠る よ |
| (2) Video | (私は見る) | <i>Kínkarva</i> < <i>ku-inkar-va</i>
私は 見 るよ |
| (3) Rideo | (私は笑う) | <i>Kméinua</i> < <i>ku-mina-va</i>
私は 笑うよ |
| (4) Lacrymo | (私は泣く) | <i>Ktschíschianva</i> < <i>ku-čiši-an-va</i>
私は泣いているよ |
| (5) Non video | (私は見ない) | <i>Eín kínkarva</i> < <i>hem ku-inkar-va</i>
ない 私は 見るよ
(私は見ないよ) |
| (6) Non dormio | (私は眠らない) | <i>Eín kmúkarva</i> < <i>hem ku-mokor-va</i>
ない 私は眠るよ
(私は眠らないよ) |
| (7) Sto | (私は立つ) | <i>Kániga-kásianua</i>
< <i>ku-ani-ga ku-asi-an-va</i>
私 も 立っているよ |
| (8) Stas | (お前は立つ) | <i>Eá-siana</i> < <i>e-asi-an-va</i>
お前立っているよ |
| (9) Stat | (彼は立つ) | <i>Eá-sianuà</i> < ? <i>asi-an va</i>
〔彼〕立っているよ |
| (10) Stamus | (我々は立つ) | <i>Róski earasiugà</i> |
| (11) Statis | (お前たちは立つ) | <i>Einketsch roski-eiranà</i> |
| (12) Stant | (彼らは立つ) | <i>Ókaja-róski-tschùà</i> |

- (1)~(8) には問題はない。(5)(6) の *Ein* は *Em* の誤読であろう。
 (9) では *Eá* は *a* の誤記ではあるまいか。
 (10)~(12) の *roski* は *as* の複数形である(北海道アイヌ語と同じ)。
 (10) は北海道方言ならば *roski-an* (包括形), *roski-as* (対他形) である。
 (11) は北海道方言ならば *eci-roski* である。*einkeč-roski* という形には *eč-roski* がふくまれているのであろうか。もしそうならば, *eink-* はなにか。私には不明である。
 (12) 北海道幌別, 帯広方言 *okay* 「彼ら」参照。 *-tschua* [-čua] は何か, 不明である。

ロ. 受動の形式

北海道方言では *a-* によって受動形がつくられる。

<i>a-en-kore</i>	私与えられる	<i>a-un-kore</i>	私達与えられる
<i>a-e-kore</i>	君与えられる	<i>a-echi-kore</i>	君達与えられる
<i>a-kore</i>	彼与えられる	<i>a-kore</i>	彼等与えられる

(金田一・知里, アイヌ語法概説, p. 68)

樺太アイヌ語では, *an-* によって受動形がつくられる。

<i>an-cire</i>	焙られる, 焙られた
<i>an-kara</i>	つくられる, つくられた

(ドプロトウォルスキー辞典による)

北千島アイヌ語では樺太アイヌ語と同じく *an-* によって受動形がつくられることは鳥居龍蔵氏の資料から明らかである。

<i>ankari</i>	「出来る」	< <i>an-kar</i>	(つくられる)	(「千島アイヌ」, p. 116)
<i>an rona</i>	「殺されたり」	(同,	p. 117)	

D の資料でも次のような例が見られる。

<i>anainakurp</i>	< <i>an-ainukor-p</i>	(尊敬されるもの)
<i>aniskap</i>	盗まれたる	< <i>an-iska-p</i> (盗まれたもの)

<i>ankarkar</i>	出来上りたる	< <i>an-karkar</i>	
<i>ankuva</i>	飲みほしたる	< <i>an-ku-va</i>	(飲ま・れる・よ)
<i>anman</i>	料理せる	< <i>an-ma-p</i>	(料理さ・れた・もの)
<i>ansospa</i>	引裂く	< <i>an-sospa</i>	(剥が・れる)
<i>ansura</i>	遠ざける	< <i>an-sura</i>	(離さ・れる)
<i>ansuucep</i>	煮た魚	< <i>an-suwe cep</i>	(煮ら・れた・魚)
<i>anutumasiri</i>	混合せる	< <i>an-utumasire</i>	(混ぜ・られたる)

ハ. 否定禁止の形式

(1) *hem*

クラシェンニコフの資料では次の否定形式が見られる。

「私は見ない」(non video) *eín-kínkarua* の *eín* は *ém* の誤読であろう。
m を *in* と誤読したのであろう。北千島語の *h-* は **K** によって表記されず、**D** によっても大部分表記されていない (**T** によっては表記されている) から、*em* は正しくは *hem* を表わすと見ることが出来る。そこで上記の例は *hem ku-inkar-wa* 不・私見る・よ (私・見・ない・よ) を表わす、と解釈できる。同じようにして

「私は眠らない」(non dormio) *eín kmúkarva* <*hem-ku-mokor-wa* 不・私眠るよ (私・眠ら・ない・よ)

「黙れ」(Sile imp. 命令形) *eínkitokrosiva* は <*hem-ku-itak-rosi-va* 不・私話し・たい・よ (私・話し・たく・ない・よ) と解釈でき、「黙れ」という訳は誤りである、と見られる。

同じ形式は **D** のシュムシュ島アイヌ語資料にも見られる。

金田一・知里, アイヌ語法概説 (1936年), p. 118 には, 動詞法語尾のひとつとして *-nu* が示され, *turesh* 「妹」, *tureshnu* 「妹がある」の例が示されている。

D の資料にも *-nu* が見られる。たとえば

oxokunup 人妻 <*o-hoku-nu-p*

これを念頭において **D** の次の諸例を見よう。

<i>ematnu</i>	「独身の」(妻がない)	< <i>hem-mat-nu</i> 妻がある
<i>emitanu</i>	鼻がない	< <i>hem-etu-nu</i> 鼻がある
<i>emi maknu</i>	歯がない	< <i>hem-imak-nu</i> 歯がある
<i>emkirarnu</i>	小家族の(力が無い)	< <i>hem-kiror-nu</i> 力がある
<i>emponukur</i>	不妊の(子が無い人)	< <i>hem-po-nu kur</i> 子がある
<i>emrenu</i>	名の無い	< <i>hem-re-nu</i> 名がある

hem は **K** と **D** に共通である。

ところでこの *hem* は樺太アイヌの否定の副詞 *ham* と同源と見られる。

タライカ方言 *ham chi-wante* 「我知らず」
樺太南方言 *hane (hamne) auwante* 「知らせぬ」
(金田一・知里, アイヌ語法概説, p. 177)

樺太の *ham* に対応する北海道アイヌ語の形は *somo* である。

ついでながら, *hem* は鳥居龍蔵氏の資料には見当たらない。

(2) *ne*

D には次の形式も見られる。

nematkurkur 独身の(妻・持た・ぬ・人) <*ne-mat-kor kur*
妻持つ 人

ne は *mat-kor* 「妻持つ」を否定している。つまり, *ne-mat-kor* で「妻持たぬ」を意味する。

nesipop 塩気のない <*ne-sipo-p* および

nanaykip 各々でない <*ne-anaykip* (cf. **T** *anaikibi* 皆) の *ne* も上の *ne* と機能の類似したものと見られる。

Tにおいては「何故汝は行かぬか」を *henkite e oman ne* とシュムシ
(なぜ 汝 行かぬ)

ユ・アイヌ語で言うのと述べてある(鳥居, 千島アイヌ, p. 117). **D** の例
からすれば *oman ne* でなく, *ne oman* となるはずである。「行きませ
ん」は *nebe koman* (<*ku-oman*) となっている (p. 123). 「花が美しく
ない」*chinchí neben pírika* の *neben* はこの *nebe* と関係があるだろう.

(3) 禁止の表現

Kには禁止を表わす形式は見られない. また **D** も同じである.

ただし, **D** の *etikoman* は *nie chcieć* (ポーランド語「欲しない」), *nolle*
(ラテン語「欲しない」) という訳が付いているが, 実際は *itek oman* 「行
くな」であろう. これは北海道諸方言と共通で, 樺太方言とは異なってい
る(金田一・知里, アイヌ語法概説, p. 177 には樺太アイヌ語の形として
hanka chish! 「泣くんじゃない!」が出ている).

Tには「笑うな」*nek mina* の例があるが, *nek* という形式は **K** でも **D**
でも見当たらない.

(h) 親族呼称

	K	D	T
祖先			<i>eka'shi</i>
父	<i>mitschi</i> [miči]	<i>miči, mici</i>	<i>michi</i>
母	<i>aapu</i> < <i>hápo</i>	<i>aapu</i> < <i>hápo</i> <i>nonno</i>	<i>nonno</i>
息子	<i>kpúhu</i> < <i>ku-pó-ho</i> [私の息子]	<i>poo</i> <i>yuturut poo</i> 末の息子 [間の息子]	
娘	<i>kpommatschi</i> < <i>ku-pon-mači</i> [私の娘]	<i>pomat</i> < <i>pon-mat</i> <i>yuturut pomat</i> 末の娘 [間の娘]	
兄	<i>kiupì</i> < <i>ku-yupi</i> [私の兄]	<i>ubu</i> < <i>hupo</i>	<i>habo</i>
弟	<i>kakì</i> < <i>ku-aki</i> [私の弟]	<i>akipu</i>	<i>akibo</i>
姉	<i>ksa</i> < <i>ku-sá</i> (又は <i>saha</i>) [私の姉]	<i>kiyani aapu</i> < <i>hápo</i> [年上の・姉]	
妹	<i>uarmát</i> < <i>wara-mat</i>	<i>materpiy</i> [年下の女]	<i>ake'bo</i>

比 較

Ch. III 493 *michi* 父(ホロベツ, ハギノ, シラオイ, ピラトリ, ビロオ, メムロ, チロット, シラヌカ, フプシナイ, アシヨロ, クシヤロ, ビホロ)

Ch. III 494 *hápo*

① 母(レブン, ホロベツ, シラオイ, ムカワ, サル, シズナイ, オギフシ, ウラカワ, サマニ, メムロ, フシコ, シラヌカ, アカソ, ビホロ)

② 父(チトセ, ホベツ)

③ 兄, 姉(チシマ)

Ch. III 495 *po*

① 子(北海道, 樺太)

② 男の子(ビホロ)

Ch. III 524 *pon-mat (ch-i)* めかけ(北海道)

「娘」は北海道では *matkači matnepo* が多い

Ch. III 501 *yup(-i)* 兄 日常会話で *yup* の人称形語幹として *yupi* を使う地方(ホロベツ, エベオツ, カラフト)と, *yupo* を使う地方(シラオイ, チトセ, サマニ, チカブミ等)がある。

Ch. III 502 *hupo* 兄(チカブミ)

Ch. III 503 *ak (-i)* [イブリ及びヒダカ西部では第3人称短形のアクセントは *a-kí*, チカブミ, カラフトでは *á-ki*] 弟(チカブミ, フシコ, ハルトリ, カラフト)

Ch. III 504 *akpo* 弟(イブリ, ヒダカ西半)[雅]

Ch. III 504 *sa* 姉(北海道, 樺太) 日常会話の言語で人称語幹(従って第3人称形)を *saha* とする地方と *sapo* とする地方とがある。
ku-saha 「私の姉」(ホロベツ, シラオイ, テシオ, シラウラ, タライカ, オチホ, チライ, ウソロ)

Ch. III 505 *hapo* 姉(テシオ) *hapo* は方言によって

① 父, ②母, ③ 兄, ④ 姉等の義をもつ

北海道, 樺太で「妹」をあらわす普通の単語は *tures* である。

	K	D	T
妻	<i>kmatchi</i> < <i>ku-mači</i> [私の・妻]	<i>*mat (matkonresi</i> < <i>mat-kor-rusuy</i> 「妻を持ちたい」の)	<i>machi</i>
夫	<i>kokaiò</i> < <i>ku-okayo</i> [私の・男]	<i>*hoku (oxokunup <o-</i> <i>hoku-nu-p</i> そこに・夫 ・ある・者=人妻の)	<i>kokkai</i> < <i>ku-okkay</i> 夫 [私の男]
孫		<i>kumuči <ku-miči</i> 孫 [私の孫]	
叔父		<i>ačipo</i>	<i>achabo</i> 翁 <i>keukeu</i> 伯父
叔母		<i>unapi <*unarpi</i> <i>metki</i> おばさん	<i>unabe</i> 姥 <i>met'ke</i> 伯母
姪		<i>matkarku <mat-karku</i>	
甥*		<i>*karku (mat-karkuの)</i>	
いとこ		<i>ačipu mičakipu</i> (叔父) 父 弟 <i>ekugu <koko</i> [お前の・婿]	
むこ		<i>kuku <e-koko</i>	
嫁		<i>kosmat</i> <i>ekosmači <e-kosmat-i</i> 姪 [お前の・嫁]	

比 較

- Ch. III 523 *mat(-i>chi)* 妻
 (北海道, 樺太, 北千島)
- Ch. III 521 *hoku* 夫 (北海道)
- Ch. III 466 *okkay(-o)* 男 (北海道, 樺太・タライカ)
- Ch. III 490 *michi* 孫 (カラフト) < *mit*. 北海道は *mitpo*, *mippo* が
 多い.
- Ch. III 508 *achapo* 伯叔父 (シラオイ, ムカワ, ホベツ, シズナ
 イ, サマニ, ビロオ, ハルトリ, トオロ, アカン, クッシャロ, ウ
 ソロ)
- Ch. III 508 *kewsut* 雅語で伯叔父を言う (ビホロ, ホロベツ)
- Ch. III 509 *unarpe* 伯叔母 (レブン, アブタ, ウス, ホロベツ, シ
 ラオイ, ホベツ, サル)
- Ch. III 510 「北海道の *unarpe* (伯叔母) に当るらしい *unabe* とい
 う語が北千島にあるけれども, その意味は少しちがっていて「姥」
 「婆」の意味に用いられる. **D** の *unapi* は「叔母」であるから, 鳥
 居氏の「姥」はもともと「伯叔母」であることが明らかとなる.
- Ch. III 511 *matkarku* ① 姪 ② 従姉妹 (北海道)
 [*mat* (女) + *karku* (甥, 従弟)]
- Ch. III 510 *karku* ① 甥 ② 従兄弟 (北海道)
- Ch. III 512 *kok(-o)* むこ (北海道東北部, カラフト)
- Ch. III 513 *kosmat(ch-i)* よめ (北海道)
 [*kos* (軽) + *mat* (女, 妻)]

暫定的な結論

「はしがき」にのべたようにアイヌ語方言は北海道方言（北部方言，南部方言），樺太方言，北千島方言の3つに分れると言われる。この3者の相互関係はどういうものであろうか。

金田一京助教授はその論文「樺太アイヌの音韻組織」（1911年）の中で次のような説をのべられたことがある。

「樺太に特有の子音。……第 l, h（軟口蓋摩擦音）……これは……ドイツ語の Nacht, Acht などの ch 音に似たものである。ah「釣」rah「毛」など無数に存在するが，時としては甚だ弱く単に ah, rah などの所謂帯気音（*aspirate*）の様にも聞え，もっと弱い時には全く a, ra とだけしか聞えぬこともある。……

「さてこの音はどういう際に起こっているのかということは北海道アイヌ語と比較してみるとよく解る。

北海道アイヌ語	樺太アイヌ語
<i>itak</i> （語）	<i>itah</i> （語）
<i>tek</i> （手）	<i>teh</i> （手）
<i>rap</i> （毛）	<i>rah</i> （毛）
<i>chep</i> （魚）	<i>cheh</i> （魚）
<i>mat</i> （女）	<i>mah</i> （女）

（金田一京助選集 I, p. 349）

「なお私はこの音は千島アイヌにも存しているだろうと推測している。それは樺太アイヌ〔は〕「舌」のことを *au* 若しくは *auh* と言っている。北海道では *par-um-be*（直訳「口中の物」の義）で，少しも連絡が無いが，鳥居龍蔵氏の「千島アイヌ語」の中に舌のことを *auk* と書き，末に *h* を小字で書き添え，括弧して「注意すべき発音」と注意書きをしてある。その事情を推測するに必ずこれ樺太の *auh* の原形たる *auk* であって而もその *k* が将に樺太の *h* 音にならんとする過程にあるか，若しくは既に

k が摩擦音 (*h*) に化せるものかである故であろう。根室釧路にかけては未だ摩擦音とはならず、而もまた破裂 (explosive) をさせずに、密閉の作用だけに止まり、宛もいわゆる遮断音 (implosive) になっている。そのほかにも私のこれまで聞いた限りではアイヌ語の語尾の *k*, *t*, *p* は、全く支那語の入声音の如く、破裂させず、遮断するだけに止まるようである。胆振地方もみなそうであった。」

(同上 p. 351)

樺太アイヌ語の音韻上のきわだった特徴のひとつは音節末の implosive *-p*, *-t*, *-k* が軟口蓋摩擦音 *h* に転化していること¹¹⁾である。そして金田一教授は鳥居氏によるシュムシュ島アイヌ語の「舌」をあらわす単語「*auk^h* (注意すべき発音)」のうちに、*auk* というアイヌ語単語が (金田一教授によれば樺太は *au* 又は *auh*) 樺太的な形 (*auh*) への過渡の状態にあるか、或いはすでに *-k* が千島アイヌ語において「摩擦音 (*h*)」に転化している証拠を見ようとされた。もし、この説が正しければ、千島アイヌ語は音節末の *-p*, *-t*, *-k* の点で北海道アイヌと樺太アイヌとの中間に立つか、或いは樺太アイヌと同一の段階に立つ、ということになるまいか。

ところで「舌」をあらわすアイヌ語単語として *auk* は実際に証明されているであろうか。わたくしの知る かぎり、証明されていないようである。

手もとにある資料で「舌」に対するアイヌ語をしらべて見よう。

北 千 島	{	シュムシュ、ポロムシル・アイヌ語(クラシェニニコフ, 1738年)
		<i>Achu</i> [<i>áxu</i>] (ローマ字)
		<i>axy</i> [<i>áxu</i>] (ロシア字)
		シュムシュ・アイヌ語 (DYBOWSKI, 1879~1882年)
		<i>ав</i> [<i>av</i>] ロシア字 (括弧内はローマ字転写)
		シュムシュ・アイヌ語 (鳥居龍蔵, 1899年)
		<i>auk^h</i>

樺太 { (ラベルース, 1787年) *aon* ビツマイエルの指摘するように (引用文献参照) これは *aou*[*au*] の誤植であろう。
 (ドブロトウォルスキー辞典, カザン 1875年) *av*[*au*] (ロシア字)
 (知里真志保, 分類アイヌ語辞典 3 (1954), p. 194)
 トライカ方言, 第3人称形 *áwe*, *áwehe*
 トライカ以外の樺太の第3人称 *áwhe*
 (服部四郎, 1950年代) *aw*, *-ehe*

北海道 宗谷 *aw*, *-ehe* (服部四郎編アイヌ語方言辞典)

鳥居氏の資料においても *chip*「舟」, *imak*「歯」のような単語から金田一教授の推定とはちがった推定に導かれるはずである。

そして, クラシェニンニコフの資料も DYBOWSKI の資料も音節末に *-p*, *-t*, *-k* をもつ多くの単語をふくんでいる。そこで **K** の時代にも, **D** の時代 (それは鳥居氏と同時代である) にも, 北千島アイヌ語では *-p*, *-t*, *-k* はかかるものとして存在していた, と結論されるのである。音節末の *-p*, *-t*, *-k* の点では北千島アイヌは北海道アイヌと同一発展段階に立っていたということができるようである。

それでは, 金田一教授が重要視された *auk^h* (鳥居氏の表記) はどのように解釈すべきであろうか。

クラシェニンニコフの(北千島)アイヌ語には前記の *áchu* [*áxu*]「舌」のほか, 次のような *-y*, *-w* をもつ語が *x* を伴っているのが見られる。

クラシェニンニコフ

北海道

「召使」 *usichu* [*usixu*]

各方言 *ussiw*

「頬」 *nutkichu* [*nutkixu*]

各方言 *notakew* (あご)

「あられ」 *kaukach* [*kaukax*]

各方言 *kawkaw*

「矢」 *achi* [*axi*]

各方言 *ay*

「召使女」 *kusiuhe* <*ku-usiu-he*, 「[私の] 息子」 *kpáhu* <*ku-póho* <*ku-*

pó-ho を考慮すれば、**K** の *-chu[-xu]*, *-chi[-xi]* は「人称形」と関係があるのではなからうかとも推定されるが、そうではあるまい。「舌」をあらわすアイ語の「概念形」*aw* の「人称形」*awehe* が、鳥居氏によって *auk^h*, **K**によって *áchu[áxu]* と表記されたと見ることはできない。

さて、語彙的に見て、北千島アイヌ語は北海道北部方言にきわめて近く、それと同時に、樺太アイヌ語と共通するものが少なくない。この事実はどうのように解釈さるべきであろうか。

樺太と北千島との間にオホーツク海が横たわっていることをかんがえるならば、両方言の相互影響によって両者のあいだの共通性が生まれた、と主張することはできない。北海道アイヌ語が南部方言と北部方言にわかれてから、北部方言をはなす一部のアイヌが早く樺太にわたって樺太方言が生まれ、他の一部が後に北千島に渡って北千島方言が生まれた、と解するのが合理的のように思われる。つまり、樺太方言も北千島方言も母体は北海道北部方言である、と考えることができないだろうか。ただし、樺太への移住が、きわめて古い時代から幾回にもわたって行なわれたらしいことも考慮しなければならない。

註

- 1) 知里真志保, アイヌ, 言語, 世界大百科事典, I, p. 31.
- 2) 同上.
- 3) 同上.
- 4) 知里真志保, アイヌ語入門, 56-58 ページ.
- 5) И. С. Берг. Открытия Русских в Тихом Океане. Тихий Океан. Л. 1926, (p. 14).
- 6) この資料は私が原稿から活字にしたもので, 私の前に発表した者はいない. この発表にはつぎの誤植があるので, この機会に訂正しておく.

箇所	印刷されている誤つた形	正しい形
69ページ 右の段 上から4行目	Kikitokrosiva	Kitokrosiva
” ” 上から12行目	Eorasiugà	Earasiugà
” ” 上から18行目	Eín Kinúkarva	Eín Kmúkarva
” ” 上から24行目	Teuniua	Teuninua
70ページ ” 下から13行目	ikasmau	ikasmua

- 7) クラシェニンニコフ, カムチャツカ地誌, 1949年版, pp. 560-578 にはじめて発表された1738年8月29日付, ボリシェレツク 発のクラシェニンニコフのグメーリン (J. G. GMELIN), ミレル (G. MUELLER, ロシア名は G. Миллер) 宛の第6報告. グメーリンもミレルもドイツ人であるが, ペテルブルグの科学アカデミーの会員としてロシアに滞在し, ペーリング探検隊に参加していた. クラシェニンニコフは学生として探検隊に加わっていた.
- 8) 吉田東伍, 大日本地名辞典, 北海道・樺太・琉球・台湾 (昭和14年), 352ページにはつぎのように述べられている.

「明治17年〔1884年〕根室県令湯地定基, 地島を巡航し, 占守郡占守島に至り, 土人〔アイヌ人〕に示諭し, 九十人余人を率ひて帰り, 色丹島に移住せしむ. 18年〔1885年〕これに因り, 本島を千島国に編入し, 色丹郡と称せしむ. 後土人は口数漸減し, 今や七十名に満たずとぞ.」

鳥居龍藏氏はつぎのように述べる.

「余の千島に趣きたるは明治32年〔1899年〕5月なり. ……根室より色丹に着ける. 当年千島土人は悉く色丹に移住せしめ居るを以て, 余は取調の便を得る為めグリゴリーと云へる, 能く物事を弁へ居る当年五十有余歳の老人を備ひ入れたり……色丹島は 当時は千島土人の居住地なるを以て調査するの必要より……此処に滞留することとせり. 即ち二十七八日色丹に滞在したる間に余は土人の体格, 風俗, 其他口碑, 宗教等の調査より, 写真撮影の事に従事せ

り、……二十七八日後根室より船の来るに会し、之に乗りて再び択捉島のモヨロップに着し、遂に根室に帰り、直ちに根室を出帆して函館に到着し、陸奥の地を踏んで東京に帰着せり」(鳥居龍蔵, 千島アイヌ, 1903年, 吉川弘文館, 1, 2 ページ)。

シコタン島の北千島アイヌ人についての簡単な記述は1930年シコタン島を訪れたスウェーデンの生物学者、探検家 ステン・ベルクマンの「千島紀行」(加納一郎訳, 時事通信社, 時事新書, 1961年, 168 ページ以下)に見られる。

- 9) 知里氏は「千島方言はもと北千島の島々に行われ、1912年前後までは未だこれを記憶する老人もあつた……」(世界百科事典, I-31)と述べるが、スウェーデン人ステン・ベルクマンが1930年9月シコタン島で会つた2~3の、ロシア語をおぼえていた老婆は北千島語をいくらか保持していたと見ることができよう(加納一郎訳, 千島紀行, 時事新書, 1961年, 170ページ)。
- 10) この資料は J. BATCHELOR, *An Ainu-English-Japanese Dictionary* (3版, 東京, 1926) の *Bibliography* にあげられていないし, B. PIŁSUDSKI, *Materials for the study of the Ainu language and folklore* (Cracow 1912) にもあげていない。Berthold LAUFER (1874-1934, W. HEISSIG, *Mongolistik an deutschen Universitäten*, Steiner, Wiesbaden, 1968, S. 5)によればケルンに生れ、ライプチヒ大学でドクトルになつた後、ドイツの大学で地位を見つけえないため渡米した。「モンゴル文学概論」1907年は有名)はアイヌ語数詞論(「引用文献」参照)(これは1935年発表の金田一京助教授の「数詞から見たアイヌ民族」とともに、アイヌ数詞研究として重要な論文である)の中でバチュラーの *A Grammar of the Ainu Language* (横浜, 1903年)とアイヌ英和辞典(第2版, 東京, 1905年)に I. RADLIŃSKI 編アイヌ方言辞典が挙げられていないことを指摘している(193 ページ, 脚註 2。ただしクラコウ, 1891とあるのは, 1892の誤り)。LAUFERはこの辞典が DYBOWSKI の辞典の改編であることを示さず, また掲載誌をも示さなかつた。
- 11) -p, -t, -k がいつころ樺太方言において -h に転化したかという問題について、わたくしはつぎのように考える。1787年樺太西岸を調査したフランスの探検家ラ・ペルーズの「世界周航記」(*Voyage de La Pérouse autour du monde*, Paris 1797)の第31章の付録はチョーカ島〔カラフト〕住民の語彙集, ラングル湾〔クシュンナイ湾〕で作製〕であり, 160のアイヌ単語を採録している(August Pfizmaier, *Bemerkungen über die von La Perouse gelieferte Wörtersammlung der Sprache von Sagalien*, *Sitzungsberichte*

der kaiserl. Akademie der Wissenschaften, Februar-Heft des Jahrganges
1850 による)。この語彙集では次のような表記が見られる。

ラ・ペルーズ (1787年) 久春内

- | | | |
|-------|-----------------|------------------------------|
| 「齒」 | yma [ima] | 北海道帯広・美幌方言 imak 「齒」 |
| 「前腕」 | tay [te] | 北海道各方言 tek 「手」(hand and arm) |
| 「あま水」 | ouachka [waḥka] | 北海道各方言 wakka 「水」 |
| 「太陽」 | tsouhou [cuḥu] | 北海道各方言 cup 「太陽」 |
| 「5」 | aschne [ashne] | 北海道各方言 asiknep 「5」 |

これによれば、樺太アイヌ語では音節末の -p, -t, -k が 18 世紀後半には
-h に転化していたことが想像される。